〈他者〉とかかわる力を育てるための「読むこと」の学び

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科 有木 大輔・澤田 英輔・杉村千亜希 関口 隆一・千野 浩一・東城 徳幸 平田 知之

# 〈他者〉とかかわる力を育てるための「読むこと」の学び

筑波大学附属駒場中·高等学校 国語科

有木 大輔・澤田 英輔・杉村千亜希 関ロ 隆一・千野 浩一・東城 徳幸 平田 知之

## 要約

本プロジェクトでは、「〈他者〉とかかわる力育てるための読むことの学び」として、どのような指導が可能 であるかを検討した。ここでいう「他者」とは、同級生などの仲間という意味だけでなく、学習者にとって未 知の概念やものの見方なども含めている。中一から高二までの実践を通して、学習者の発達段階に応じた指導 を試みた結果、他者とのかかわりを意識した指導は、「伝え合い」「分かり合う」学びだけでなく、総合的な教 科指導に結びつくことを確認した。

## キーワード:読むこと 書くこと 伝え合い 調べ読み 学習指導要領

# 1 テーマ設定の理由・基本方針

## 1.1 テーマ設定の理由

『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』(全国大学国 語教育学会編 2013)には、近年の国語科教育の関心 として、次のように概観されている。「読むこと」を通 し、テクストや自己を含めた他者との関わりを学び、 それらの思考を再認識し、それらがどのような社会的 背景を持つのかを考えさせる学習に重点を置く。関連 して、塚田泰彦氏は、読むことは文意を理解すること に制限されるのではなく、包括的な思考活動に支えら れた表現行為であると主張する(『月刊国語教育研究』 446 号、2009)。

今年度の『月刊国語教育研究』では、「豊かな言語生 活を育む」(3月号特集)「人間関係力を育む国語教育」

(5月号特集)など、関連する特集が組まれている。 両者でいうところの「他者」とは、他人という意味だ けでなく、学習者にとって未知の概念やものの見方な どを意味する。

本校のような、中高一貫の男子校かつ入学試験によ ってある程度均質化された学力の学習者の集団は、人 間関係においても考え方においても固定化されがちで ある。ともすれば閉鎖的になりがちな現状を鑑み、他 者と自己との適切な関係性を築く力を涵養すべく、授 業を考えていくことにした。

#### 1.2 基本方針

「読むこと」には、幅広い読みの活動を視野に入れ ている。ひとりで読むのか、皆と読むのか。「皆」 は、同級生なのか、別の人なのか。また、教室で読む のか、図書室で読むのかという場所の問題も関わって くる。何よりも、何を読むのかという教材によって「読 むこと」の学びは、多様に考えられる。

その中で、国語科における学習指導として、どのような実践が出来るかを考えた。このことは、当然ながら対象とする生徒の学年に応じ、段階を追ってなされるべきである。

以下、実践報告を見つつ考えていきたい。

# 2 実践報告

#### 2.1 各実践の概要

今年度、本校国語科教員が行った主な実践概要は次 の通りである。

学年(教員名)	実践テーマ
美	こ 我内容の概要

中学

中1国語(東城)	他者とのかかわりによって読書
	の主体をつくる
自律的読者の育成を目	目標とし、ここ数年継続して中学生
への読書指導を行って	いる。本年度は中学校1年生を対

Learning to read in order to foster the ability to associate with others

象とした。実践の柱は二つあり、一つは読書記録とその 分析、もう一つはブックトークである。

前者の読書記録は「自分の読書環境を把握すること」 を目的としている。読書環境とは、自らの読書行為を取り 巻く内外の諸条件の総体である。この目的に即し、生徒 には読んだ本についての書誌や感想だけでなく、読んだ きっかけ・入手の手段・読書の時間と場所なども記録させ ている。ある程度の蓄積があったところでこれに分析を 加えさせ、「自分はどのような読み手なのか、どのような 読書の場に置かれているのか」を考えさせている。分析 結果は他の生徒と共有させ、各自の読書スタイルの相対 化や改善点の発見につなげていく。これら一連の学習活 動を終えた生徒には、自らの力で読書環境を把握し、変 化させる主体となることを期待している。

後者のブックトークは、あらかじめテーマを設けて本を 集め、複数の人を対象にそれらを口頭で順序よく紹介す るものである。図書館司書によって館の利用者相手にな されるのが通例だが、近年は国語教育にも取り入れられ ており、本校でも澤田教諭・加藤司書による先行実践が ある。他の生徒へのブックトークをゴールに据え、それに 向けて知識をどう関連づけ、どうプレゼンテーションして いくかをこれまで生徒各自に考えさせてきた。読書記録 の蓄積を表現行為につなげるよい機会となっている。ま た、本年度の試みとして、昨年度他学年で行われたブッ クトークの記録動画を活用した。ブックトークに対する具 体的なイメージや目指すモデルをもたせる他、あらかじ め注目点を定めさせ動画を分析させることで、プレゼンテ ーションについて、自他を評価する観点の形成と構想力・ 技術力の向上を促している。

主要参考文献:

塚田泰彦『読む技術』創元社、2014

杉本直美『読書生活デザインカ』東洋館出版社、2010 笹倉剛ほか『学校 DE ブックトーク』北大路書房、2007

中2国語(関口)	他者とかかわることで生まれる新
	しい読み
教室で生徒が読解を学	学ぶ際、読解の目標を持った教師
によって生徒の読みを	高めていくことは大切だが、それと
は別に、今年度は教室	<b>፪の集団性を生かして生徒同士で</b>
かかわりながら読みを	·深めていく方向を目指した実践を
行った。中学2年生を対	対象とし、小グループによる考察と
発表活動を伴う形で、	1学期は説明的文章、2学期は小
説と詩を題材にした。し	いずれも対象となる文章の読解の
ポイント、あるいは読み	9解きにくい点について個々の生

徒が考察し、それに基づいてグループ内での討論を行い、その結果をレジュメを用いたりしてロ頭発表し、聞き 手である他の生徒の評価を受けるという形式である。

各生徒が自分自身の関心を元に読解に必要な考察を 深めていく形は、生徒の意欲を高め持続させるために役 に立つ。また、対象となる文章、作品に取り組む過程に は、文章そのものの持つ他者性とともに、読者としての生 徒同士の違い、またそこでの説得/受容(納得)活動が 存在するので、単純な正解探しに終わらない読解活動が できたものと思われる。

中3国語(杉村)	『平家物語』の参考書を作る
	* 稿末資料参照
【学習活動】	
①本や文章などから必	る要な情報を集めるための方法を
身に付け、目的に応じ	て必要な情報を読み取る。
②集めた材料を分類す	「るなどして整理するとともに,段
落の役割を考えて文章	を構成する。
③書いた文章を互いに	ニ読み合い, 題材のとらえ方や材料
の用い方、根拠の明確	さなどについて意見を述べたり,
自分の表現の参考にし	したりする。
④決められたテーマに	ついて報告や紹介をしたり, それ
らを聞いて質問や助言	をしたりする。
【授業内容】	
①1クラスを4名×10	)班に分け、1 班—「成立」・2 班—
「作者」など『平家物語	』に関するテーマをそれぞれ与え
る。	
②班ごとに調査を行い	、1ページ分の文章にまとめる。図
書室の書籍や校内の	パソコンでインターネット検索を利
用する。	
③全クラスの班の原稿	を集め、目次・表紙をつけて冊子
状の『参考書』にし、配	布。1 学年3 クラスで、班ごとのテ
ーマは同じなので、一	つの題に関するまとめ文が3本ず
つ並ぶことになる。	
④クラスメイトの前で、	班ごとに調査結果を口頭発表。聴
衆は、リアクションペー	パーを書き、互いに共有する。
グループ学習・調~	ジ学習の授業だが、眼目のひとつ
は、同じテーマに基づ	く3本のまとめ文を並べて収録する
	がった『参考書』には、〔1 班 成立
	)(C組の文)]というように並ぶ。同
じテーマでも記述が同	じになるとは限らない。 資料を読

み、まとめた結果が、自分たちと同じ部分もあれば、異な る説に典拠する部分もあることを知る経験が大切である と考えた。そして、書籍やHPによって、様々な理解の仕 方があることを知ったうえで、それぞれの情報を吟味する ことも含め、〈他者〉との関わりを学ぶ授業を目指した。

なお、この授業では学年のサイトを活用し、原稿提出 や編集作業をオンラインで行った。その結果、生徒たち は放課後の図書室やパソコン室、自宅のパソコンなどで も作業を行うことができ、教員への提出もスムーズに行う ことができた。

#### 高校

高2(有木)	江戸期の唐詩注釈を読む
江戸時代の唐詩の淡	注釈書を読んで、唐詩を鑑賞する。
現在の注釈書とは異な	こる意見を比較し、どちらが妥当か
吟味する。こうすること	で、鎖国中の江戸時代に日本人
が中国(唐)のことをど	のように認識していたかが解る。
また、江戸時代の表現	たまも味わうことが出来る。
イケギッナ曲ナーエ	

千年前の古典を三百年前のフィルターを通して見ること で、古典のかかわりかたも違ってくると仮定した授業を行 った。

今の研究では、明らかに誤りであったり、二通りの説が あるものを提示して生徒に感想を書いてもらうと、必ずし も今の説を支持するわけではなく、豊かな考えが窺え た。

高2 (杉村)	皆で探す和歌の世界—『古今集』
	夏部から—
【学習活動】	
①和歌を読み、語句の	)意味・修辞を理解する。(内容を的
確にとらえることに関す	する指導事項)
②和歌の読解を通して	こ表現の特色を理解し、その魅力を
知る。	
③まとまった分量の和	歌を読み、歌語の持つ意味の広が
りに気づき、話し合う。	(読み比べたことについて説明す
る言語活動)(古典を読	売み味わい、作品の価値について
考察することに関する	指導事項)
【授業内容】	
①『古今集』一五二番	歌を読解する。
②『古今集』夏部のす・	べての和歌を載せたプリントを配布
し、ホトトギスの詠まれ	した歌 28 首を 14 班で分担して分析
する。	
③『古今集』夏歌のホト	~トギスが持つ歌語としての意味に
気づき、他者と共有す	る。
④③をふまえて一五二	二番歌を読み、解釈を深める。

和歌の学習のひとつとして、和歌表現の持つ意味の広 がりを生徒に感じさせたいと思い計画した授業だった。は じめは、ホトトギス歌の分析を個人作業として考えていた が、「大変すぎる」「皆で分担したい」という生徒の声で班 活動にすることにした。三人で一班を作り、2~3首ずつ 分析をさせた。後の分析結果の共有では、意見の合致に 喜んだり、クラスメイトの鋭い読みに歓声が上がったり、 〈皆で学ぶ〉メリットを得ることが出来た。(今年度本校教 育研究会公開授業より)

## 2.2 考察

#### 2.2.1 中学校の実践から

中学の授業では、特に自己の読みと他者の読みを意 識することに重点を置き、学年が上がるにつれ、どの ような指導が可能であるかを模索した。

中一の授業は、読書記録によって自分の読み方を自 覚し、他の生徒の読書習慣を知ることで、自らを相対 化する活動を行っている。さらに、その次の段階とし て他者を念頭において話す活動をブックトークが担っ ている。読書という個的な活動を目に見える形にする ことで、他者と自然なコミュニケーションが生まれる ような教室づくりを行った。

中二の授業では、共通の教材を用い、自他の読みを 意識しつつ考察する活動を行った。同じ文章を読んで も、自分と他人とでは受け取り方が異なることがある ということを実体験させるところに狙いがある。さら に、生徒同士の意見交換により読みの妥当性を考えて いく活動は、中一の活動を発展させた形を意識してい る。

中三の授業では、上記の学習活動をつなげる形で考 えた。ここでいう他者とは、他の生徒であり、それぞ れの資料の筆者である。生徒が班員と協力しながら、 調査・編集作業を通して多様な情報を吟味し取捨選択 していく活動を行った。さらに、調べたことを文章化 し、口頭発表することで、伝え合い・分かり合う活動 を企図した。

#### 2.2.2 高等学校の実践から

高校の授業では、同学年・同じクラスの生徒とのか かわりあいに加え、古典作品の成立当時の表現や後世 の受容などの文学史的な視座を導入した実践を試みた。

有木による漢文の授業は、江戸期における唐詩の受 容を題材にした。この場合、〈他者〉は江戸時代の唐詩 の享受者であり、その先に窺える唐詩の表現である。 過去の人々が、どのように古典を読んでいたのかを学 ぶことは、生徒に現代人の読み方を相対化するきっか けを与える。教員やテキストからもたらされる〈正し い読み〉を受動的に与えられるのではなく、主体的に 読む活動を行う機会を作り出した。

この試みも、〈他者〉とかかわる力を育てる学びの一 つといえるだろう。

杉村の和歌の授業は、皆で読み解き、一定の理解を 得る活動が他者とかかわる力を育てる一策になるので はないかという仮説のもとに実施された。

ひとまとまりの和歌をクラス全員で分析し、発見し たことを集約することで、和歌の表現の特徴を探る活 動を目指した。仲間の読み方を知ることは、生徒の興 味・関心を高めることにつながる。他者とかかわるこ とを通して、自分たちの力で学び取ったことは、学習 内容の理解・定着を深めるためにも有効であることを 示している。他者とのかかわる力の育成を意識した指 導は、教科の学習の質をも高めるものになりえること が実感された。

#### 2.2.3 まとめ

「〈他者〉とかかわる力を育てるための「読むこと」 の学び」について、今年度の実践をみてきた。中高と もに、学年に応じた指導を試みた。その授業でも、自 分の読み・考えと他者の読み・考えを相対的にとらえ ることで、自他の関係性を意識させることに重点が置 かれている。そのうえで、聞く人を意識して自分の考 えを伝えることや、様々な考えに触れて、それらを吟 味すること、皆の考えをまとめ、より良い読みを作り 出すことなど、国語科の学習として幅広い展開が可能 であることが見出された。

また、これらの取り組みで不可欠となったのは、「書 くこと」や「話すこと」で自分の考えを表出すること であった。読書記録や口頭発表など何らかの方法で考 えを形にし、互いに伝え合う活動そのものが他者とか かわる力の育成に大きく貢献することを再確認した。

<b>中</b> 3古文	<ul> <li>(1) 紙 テーマ【平変物語の成立】</li> <li>紙長: ・ 紙員:</li> </ul>
67期による67期のための	私達は、平家物語が、「いつ」「だれによって」「なぜ」作られためか、そして、なぜ口味という形で(琵琶法
『平家物語』参考書	師によって)広められたのか、ということについて調べました。
	いつ作らたのか:詳しいことはわかっていない、『技然気』によると1.3 単転初所、後島利能彼の頃という。 また、本文中の内容に承久の乱が含まれていることから、書かれたのは1221 軍以降であることもわかる。さら に、「智慧途命鈔」の紙件に発見された個時情能課程による「平家物語合入帖」の記述(大体 1259 単項か)によ り、この頃には性られていたと考えられる。
	右の資料が灌敷のお状。
	資料の2.3行目に「平家物語合八緒」 と書いてあるのが読める。
	(写真は『平家物語』教野和夫・小川 国夫著 より)
	<b>誰によって作られたのか</b> :後熱草より信濃前司行長という説がメジャー。詳しくは2度<作者>へどうぞ。
	なぜ作られたのか:当時あった想定信仰(堂原道真のたたり、など)のもとに、急激な没落(清護没後たった5 年も経たずに平家城亡!)を経験した平家の鎮境のためと考えられる。例えば、「耳なし労一」という揺送の中で も、労一に平家物語を語らせて自らを思めている平家(の亡妻)が描かれている。
Muniter St.	<u>なぜ口液なのか</u> : 漢字中の低さを踏まえ、広く大衆にも「平家物語」を開いてほしい(平家の預衆に参加してほしい)とした作者の配慮があった。
the second se	また、『平家物語』を語り随機を行うことは(IFなし男一のように)想要に取り選みれる危険があり、よって 認念に「魅入られる」ことの無い=官目である琵琶法師が語り手として運ばれたのだとか。
	もともと、「物語」として語るために多少の握色(一門の徳大臣である完盛を(実際とは関係なく)愚鈍に描 くことで完盛が取者に転落したあとの容易性を打ち出した。など)がされていたということもあり、世界が大衆 の反応を計算していたことがうかがえる。
	- 歩考資料 - www.asahi-net.or.jp <sup>i-</sup> edi8 <sup>+</sup> hmc/story.htm
	<ul> <li>www.asaurrec.ar.jp=Conventionalizations.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalizationalizationalization.internationalization.internationalizationalizationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalization.internationalizationalizationalizationalizationalizationalization.internationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalization internationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizationalizatioadinternationalizationalizationalizationalizationalizationali</li></ul>
	<ul> <li>『平家伝説』中公新者 拡水伝・</li> <li>「平家物語下,新胡日本古典生成』新朝社</li> <li>・『平家物語』新潮古典文字アルバム 数野和夫 小川川夫</li> </ul>
3年 組 番 氏名	・『井沢式「日本史入門」講座4 「想念法無の日本史」の容計 他間書店 井沢元帝 ・『学校では致えてくれない日本史の技術』PHP 文庫 井沢元帝
	3
	(1)班 テーマ【 成立 】 紙長: 短曲:
目次 *すべて ABC 組の順になっています。	「平家物語」は、平家の 30 年間の繁栄と誠亡を表した軍記物語である。作者・成立年ともに不明だ が、原平の動乱後の助きや、「後然草」などの他の書籍から推測することができ、聴読ある。 まず、後然草には次のように示されている。
1 班 成立 いつ?どうやって?どんなかたちに?	「後鳥羽院の即時、信濃前司 行長 稽古の優ありけるが、(中略) 毎回をすてて遺世したりけるを、慈 顔和尚、一藝ある者をば下部までも召しおきて、不便にせさせ給ひければ、この信濃入道を扶持し給ひ
2班 作者 判明している?誰?作者ではないかと考えられている人は?	けり。この行長入道、平家物語を作りて、生像(しょうぶつ)といひける盲目に数へて語らせけり。(中 略) 武士の事・弓馬のわざは、生像、実属のものにて、武士に問ひ聞きて書かせけり。かの生像がうま
3班 諸本 諸本とは?主な系統やその特徴など	れったの厚を、今の発琶は師は挙びたるなり。」(純然年 226 段より抜粋) ここからわかることは、 ・平安物新社後為邦院の治歴(1183~1221 頃)に成立したこと
4班 平曲 いつ?どうやって?どんなかたちに?	・作者は著名な学者で前司の行長であるということ ・行長は出家した後、慈鯨和尚の庇護を受け、そこで生仏という盲目の人に出会い、生仏の意見もいれ
5班 琵琶法師 いつ?どうやって?どんな人?現在もいる?	ながら作品を作りこれを生仏に語らせた ということである。 ただ、「繊維維持」や「繊単分説」という書物には作者に藤原時長をあげていて、また合職の事につい
6班 全体のあらすじ どんな話?面白いところは?どんな文体で書かれている?	ては歴光行に飲用したことや、12 巻本は層改良量が高いたなどと思してある。さらには時代が通わに つれてる巻、1 2巻、2 0 巻、4 8 巻と増えていく過程で加速者や編集者がいたとも考えられる。これ らの分化は基礎証明の語りによって生み出されたとも考えられる。語の手の産脂的位表現によって、多
7班 主な地名・戦場・史跡 『平家物語』に出てくるもの・関連する伝承など	様な表現と分化が生まれたのである。南北朝時代には一方流と八坂流という語りの異なった流派がで き、語り系の木と読み系の本の相互的な加密・修正を通して、6巻の延振体(鎌倉時代に成立)、12 第1月月日
8班 主な武具・馬具・装束・小道具 『平家物語』に出てくるもの・関連するもの	巻の八代本、党一本(南北朝時代成立)、20巻の長門本(民間伝承もいれる)、48巻の原平盛宴記な どたくさんの異本が生まれている。
9班 源義経 『平家物語』での描かれ方を中心に史実をふまえても。比較をしても。	つまり、平家物類は後鳥羽院、すなわち鎌倉時代初期に原型が行長?によってつくられた。その後発琶 法師による語りによって様々な分化をし、複数の編集者によって時代の流れと共に絶えず流動した。そ
10班 那須与一『平家物語』での描かれ方を中心に史実をふまえても。比較をしても。	して平宮の栄華盛賞と源氏の造撃を描くという一つの作品でありながら、それを超えた文学の形として 成り立っていると考えられる。
	【参考文献】 世籍の場合は、母名・華者・出版社、サイトの場合は、サイト名・作成者名を列記。
	「華記物語の世界」·永徹安明·朝日朝開社 古典の辞典

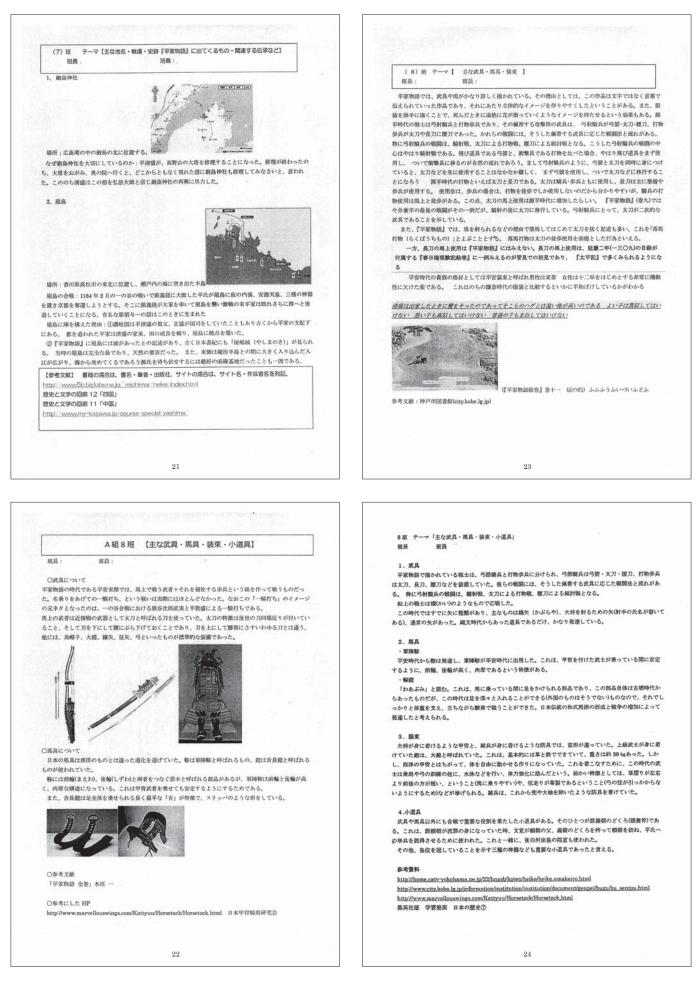
1 班 班長:	【平家物語の成立】	2.班 テーマ (作者)
平家物語、とい	えば平清盛をはじめとする平家の栄枯盛衰を著した有名な歴史小説で	
まもともとは、琵琶法	師と呼ばれる盲目の語り部によって広められたということもよく知	平家物語の作者について、古くから数多くの説がありますが、一番古い説として、吉田兼好の『後熱菜』 られているが、その 『宿遺前司行長(しなんおのぜんじゆきなが)なる人物が平安物語の作者であり、生仏(しょうぶつ)とい
立に関してははっき	りとはわかっておらずまだまだ謎が多いようだ。そこでこの1斑は	、この謎多き半家物
の成立を解説してい	くとともに、自分たちなりの考察を加えていこうと思う。	目の音楽家に教えて語らせた』と記されています。また、生仏なる人物が東国出身であったために、武士や
		話を生仏自身が武士に直接母ねて記録したとする説や、生仏と後世の琵琶法師との関連を述べるなど、記述
	iの成立を簡単に解説していこう。この物語は、初期は3巻ないしは	
	当時は保元物語や平治物語などとともに四部の合戦状とよばれてお	
	由承1年から始まった合戦を題材にした物語ということで治承物語と	
	現存のものと同じ12巻の形に整えられたと考えられている。成立	
	総記の記述などから1240年よりは前に成立していたのだろう。	a b u li 3 li m o d
	▶6その50年後くらいには、原作が闘まったことになる。とはいえ 関係がないと仮定してしまうと1309年以前の成立としか校り切	
C 80 9 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	BIRDAY CRECCCA / CI 30 3 TOMORALE ON AL / S	
ここまで調べてきた	が、この中にはいくつか鍵がある。その中でも気になるのは、どう	す。してこの話が疑惑法
こよる語りで広まっ	たのかということだ。原作と考えられている3巻本は現存していな	また額光行は鎌倉幕府の僧任が厚く、額氏物語研究や吸人としてですが、もとは後鳥羽上島の北面を見いことから、さらに
	こに関して、後半では仮説を与えてみようと思う。	いた武門の出で、永久の乱の際に京方として参加し、乱後に生房として関東に進行されたという経緯があり
	たというのはただの文化で深い意味はないのだとしてしまってはお	
	書物では広げられない理由があったのだという見方だ。では、なぜ	
	物では一般大衆には伝わらないだろうから、一般大衆に伝えるため	
	。しかし、これがあったとしたら仕掛け人は源氏側のはずだがそれ	
	。では、逆に書物で伝えるのは開題があったのかもしれない。この	
	合なことが書かれておりそれを源氏らがもみ消そうとした。それが コースアニューアン・ション・ション・ション・ション・ション・ション・ション・ション・ション・ショ	
	である語りを用いたのではないかと考えられる。	他にも「駅翌日件録(がうんにっけんろく)」は、菅原為長が12巻本の平家物語を書き、性仏(生仏)に わた際年生に近け
	合なことは何だったのだろうか。平家物語の形式は時代別に並べら  まで書くということは、安徳天皇の死と三種の神器の一つである草	#の何の約水子 米谷
	。するとこれは原氏の天皇殺しという汚名につながるし、天皇家に	
	アイテムが欠けてしまったという恥になるだろう。これは、検閲に	けもつかるな思惑と
	ために語りで広めたとは考えられないだろうか。先ほどこの作品は	四部の合能分という いう伝承を載せてあります。
	、前述の理由ならこの作品のみ語りで広まっていったというのも納	
	[2] R. S. M. M. S. M.	
	大それた仮説を考えてみた。とはいえ、別に強い根拠もあるわけで	
	でこんな面白い仮説が立てられるくらい平家物語の成立というのは	
	えればそれで十分である。某数師のせいで私たちには十分な時間も に伝えられなかったことは悔やまれるところだが、この解説を通じ	
	なく成立にも興味を持ってもらったら奉いだ。	C, Taplana C, Z
(参考サイト) 閲	日ネット「平家物語の世界」 ウィキペディア「平家物語」 平家	物語成立の謎
(参考文献) 平	「家物語を読む(川合 康 作、吉川弘文館)国史大辞典 (芳川国	分館)
	5	7
(2) 16 7		C พี่2近 デーマ [Million 2, าน]
(2)班 <del>7</del> 班段:		
班長:		C 総2紙 テーマ [1987:スパ] 服法:-
班長: 『平家物語』の作者	マ (作者) 近員:	C 総2紙 テーマ 目標に入って] ある。 (家谷歯) ・14回 期時かせのか、それともお子可能のかっ 「自ちれなから内、それともお子可能のかっ 「自ちれなから内、それともお子可能のかっ 「自ちれなから内、それともお子可能のかっ 「自ちれなから」 「自ちれなから」 「自ちた」 ・19回 第回 のたから 「自然時」のたかまで100 年近くの年月
- 班長: 『平家物語』の作者 ・信濃前司行長…吉	マ【作者】 	C 総2紙 テーマ 閉想にスマゴ 施長: **情報調防3かのか、それとも対子用的のか? 作者を指定時年月、7時である、数4方かと対えつく 福田所道路 も、甲酸酸酸 の数から 閉酸酸酸 の数立まで100 年近くの年月
班長: 『平家物語』の作者 「信濃前司行長…吉 主	ーマ【作者】	
班長: 『平家物語』の作者 「信濃前司行長…吉 主 せ 士	マ【作着】 括員: およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りで、 田泉好が多した 7歳杰取』には前の信満守の行長という人が出家し 窓門の援助により平家の物面をつくり、それを盲目の疑疑法師・生 たとある。その際生仏は「X展的もり」だったので、弓馬のことは: に最材して書いたと言われている。	C 総2紙 テーマ 的初にス・て 施展: ・ 作用当時らなのか、それともおさ用時のか? 作者を成功を見まず、不能の情報を知ったとかれている に話ら たんが訳 ・・作用が加速したな、その情報を知ったとかれている。 をのが明まれでした。その情報を知ったとかではな、と思われている。 ・・作用が加速したのを用いていた。 ・・作用が加速したのを用いていた。 ・・作用が加速したのを用いていた。 ・・作用が加速したのを用いていた。 ・・作用が加速したのを用いていた。 ・・作用が加速したのを用いていた。 ・・作用が加速したのを用いていた。 ・・作用が加速したのを用いていた。 ・・作用が加速したのでのでのでのでのでのでのでのでのでのでのでのでのでのでのでのでのでのでので
班長: 『平家物語』の作者 信濃前司行長…吉 主 ゼ 東室時長…鎌倉前	*-マ (作者) 振員: およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りで 田奈好が等した 7歳然取1 には前の信酒守の行長という人が出家し 窓円の援助により平家の物語をつくり、それを盲目の発琶法師・生 たとある。その間生仏は「原題のもの」だったので、弓馬のことは に参札して書いたさまわれている。 別の文字者。時長の収録は平時念夫人であり、安徳天皇の乳母でも。	
<ul> <li>         ・・</li> <li>         ・・</li> <li>         ・</li> <li>          ・</li> <li></li></ul>	(中零【作書】 近員: およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りで 単分がが着した『使然取』には前の信道守の行長という人が出家し 窓門の援助により半家の物面をつくり、それを盲目の短琶接面、丈 たとある。その現生仏は「東国のもの」だったので、弓馬のことは、 に数材して書いたと言われている。 別の文字者、単長の板目は下野守中山行長を持つ、範疇寺報恩院でつく	
野家物語』の作者 信濃前司行長…吉 生 業室時長…鎌倉前 領子( 録であ	(中電) 防衛: 防衛: およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りで、 国象がが帯した 行後拡減」には前の信頼での行長という人が出策し 認知の成功により平家の物節をつくり、それを盲目の経営法術・生 たとある。その部金仏は「軍国のもの」だったので、弓馬のことは、 に取材して書いたと言われている。 期の文字者。時長の収得は平時忠夫人であり、安浩天皇の乳俗でも、 ちねこ)で、従っ風に下野中中山行長を持つ、国際寺根恩院でつく る「國際精神」(室町時代初期の成立と指定)には、裏面時長が領式	C 総2版 テーマ 御御によべ口 服装:: ・・作用加助になのかり、それともお子研究のか? 作者も成功をも見 子持ちのよる、最もおかとされている「服務研究時 も、呼吸動語」の成功から「現然期」の成立まで100 年近くの利用 ないことから、その情報を決定するものではな、と聞けれている。 とはかぶの: ・・作用からしたな、どの計れている。 このた下 ・・作用からしたな、どの計れている。 このた下 ・・作用からしたな、と聞けれている。 このにの一日、 のたた 部 ・・作用からしたな、と聞けれている。 このにの一日、 のたた 部 ・・作用からしたな、と聞けれている。 このにの一日、 のたた 部 ・・作用からしたな、と聞けている。 このにの一日、 のたた 部 たた 語 たた 語 たた 語 たた 語 たた 語
	*-マ【作書】 損賞: およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りで、 田族好が等した「我然取」には前の信着守の行長という人が出家し 窓門の援助により平家の物話をつくり、それを盲目の疑望述時・生 たとある。その際生仏は「原題のもの」だったので、弓馬つことは、 に数札て書いたきわれている。 期の文字者。時長の紙母は平時を失れてあり、安浩天泉の乳母でも。 なねこ、世気見に下野守中山行長を持つ、風間寺根思院でつく、 る「電鐘鏡鏡後」(室町時代初期の成立と推定)には、裏室時長が振光 二十四巻水の「平家物画」をつくったといわれている。また、中山「	C 総2版 テーマ 御御によべ口 服装:: ・・作用加助になのかり、それともお子研究のか? 作者も成功をも見 子持ちのよる、最もおかとされている「服務研究時 も、呼吸動語」の成功から「現然期」の成立まで100 年近くの利用 ないことから、その情報を決定するものではな、と聞けれている。 とはかぶの: ・・作用からしたな、どの計れている。 このた下 ・・作用からしたな、どの計れている。 このた下 ・・作用からしたな、と聞けれている。 このにの一日、 のたた 部 ・・作用からしたな、と聞けれている。 このにの一日、 のたた 部 ・・作用からしたな、と聞けれている。 このにの一日、 のたた 部 ・・作用からしたな、と聞けている。 このにの一日、 のたた 部 たた 語 たた 語 たた 語 たた 語 たた 語
	(一マ【作書】 振員: およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りで、 単分が新した『使然取』には前の信道守の行長という人が出家し 寒門の後期により平家の物面をつくり、それを盲目の延軽が高・生 たとある。その歴生仏は『原題のもの』だったので、弓馬のことは: に数材して書いたと言われている。 期の文字者。彼年の秋日は下野守中山行長を持つ、原闢寺根思院でつく はて書いたと言われている。 即の文字者。彼年の秋日は「野守中山行長を持つ、原闢寺根思院でつく る「置顧欄林抄」(道町時代切用の成立と推定)には、東蛮時長が成代 二十四巻本の『平家物語』をつくったといわれている。また、中山 行長と同一人物であるという説もある。	C 報2班 テーマ (時間にスマゴ 服装:・ ・・作用活動時のなのか、それともお子門等のか? 作用を他の加速に見つきないため、 に定ち点 に活らう と広が成 ・・作用が時に加速に見つきないため、 「用き物語」の成立から 現然用」の成立まで100 年近くの作用 なご言う と広が成 ・・作用がらしれなみ、 にはおって、 ・・作用がらしれなみ、 にはないて、 ・・作用がらしれなみ、 ・・作用がらしれなみ、 にはないて、 ・・作用がらしれなみ、 ・・作用がられている。 ・・作用がらしれない、 ・・作用がらしれない、 ・・作用がらしれない、 にはない、 ・・作用がらしれない、 にはない、 ・・作用がらしたない、 ・・作用がらしたない、 ・・作用がらしたが、 ・・作用がらいたい、 ・・作用がらいたい、 にはない、 ・・作用がらいたい、 ・・作用がらいたい、 ・・作用がらいたい、 ・・ ・・ ・・ ・・ ・・ ・・ ・・ ・・ ・・ ・
	(一マ(作着) 当員: およびは定かではないが、様々な認がある。主な説は以下の通りで 回娘好が着した『後然年』には前の信濃守の行長という人が出家し 認知つ侵職により平案の物面をつくり、それを盲目の経歴と回、支 たとある。その原生仏は「東国のもの」だったので、弓馬のことは: に取材して書いたと言われている。 期の文字者。時長の紙母は平時忠夫人であり、安徳天皇の乳母でもi なねこ)で、使え島に下野守中山行長を持つ、黄田寺祖恩院でつく なしこ、使え弟に下野守中山行長を持つ、黄田寺祖恩院でつく なしこ、で、使え島に下野守中山行長を持つ、黄田寺祖恩院でつく なしこ、で、使え島に下野守中山行長を持つ、黄田寺祖恩院でのく なしこ、で、使え島に下野守中山行長を持つ、黄田寺祖恩院でのく 「田朝頼枝辺」(途町時代初期の成立と推定)には、東京時長が頭火 一十四巻本の『平家物語』をつくったといわれている。また、中山i 行長と同一人物であるという意もある。	
	→マ【作着】 居員: およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りで、 田族好が帯した「役然取」には前の信菌守の行長という人が出家し、 窓門の援助により平家の物話をつくり、それを盲目の短琶法師・生 たとある。その源と仏は「原題のもの」だったので、弓馬のことは、 に取材して当かれている。 期の文字者。時長の駅母は平時忠夫人であり、安徳天皇の乳母でも。 なねこ)で、従足弟に下野守中山行長を持つ、飯間寺根拠夜でつく、 る「屋間構材」(返町中代別男のな立と地定)には、東菜時長が残し、 二十四巻本の『平家物語』をつくったといわれている。また、中山 行長と同一人物であるという気もある。 研究や取人として知られるぞ者、光行の娘は"漫真町"と称し、壊犯「 男であり、双メ考査は重定法の吸の零場に恐たところから、集室中)	
近長: 平家物語』の作者 信濃前司行長…古 主 ゼ 業 室 ない 長 の作者 に ま ・ ・ 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	(一マ(作着) 当員: およびは定かではないが、様々な認がある。主な説は以下の通りで 回娘好が着した『後然年』には前の信濃守の行長という人が出家し 認知つ侵職により平案の物面をつくり、それを盲目の経歴と回、支 たとある。その原生仏は「東国のもの」だったので、弓馬のことは: に取材して書いたと言われている。 期の文字者。時長の紙母は平時忠夫人であり、安徳天皇の乳母でもi なねこ)で、使え島に下野守中山行長を持つ、黄田寺祖恩院でつく なしこ、使え弟に下野守中山行長を持つ、黄田寺祖恩院でつく なしこ、で、使え島に下野守中山行長を持つ、黄田寺祖恩院でつく なしこ、で、使え島に下野守中山行長を持つ、黄田寺祖恩院でのく なしこ、で、使え島に下野守中山行長を持つ、黄田寺祖恩院でのく 「田朝頼枝辺」(途町時代初期の成立と推定)には、東京時長が頭火 一十四巻本の『平家物語』をつくったといわれている。また、中山i 行長と同一人物であるという意もある。	C 報応紙 テーマ (1987-23-17)     服長::      ・・1987-395,54,00 1、それともお子の5,00 *・      ・・1987-395,54,00 *・      ・・1987-345,55,5,54,54,74,54,56,74,54,74,55,54,54,74,74,55      ・・1980-54,54,54,74,54,74,74,55      ・・1980-54,54,54,54,54,54,54,54,54,54,54,54,54,5
	*一マ(作着) 損員: およびは定かではないが、様々な説がある。主な談は以下の通りで、 単内の援助により平家の物面をつくり、それを各目の発琶と師・生 たとある。その際生仏は「原国のもの」だったので、弓馬のことは、 に取けして書いたと言われている。 別の文字者。母長の状母は平時を失れてあり、安徳天皇の乳母でも、 なねこして、従見県に下野や中山行長を持つ、面積寺根思院でつく、 る「随種雑号」(室町時代初県の成立と指定)には、裏室時長が現代 二十四巻本の『軍家物語』をつくったといわれている。また、中山 行長と同一人物であるという説もある。 研究や家人として知られら字者。光行の娘は、貴道にとれ、非礼 行会と同一人物であるという説もある。 研究や家人として知られら字者。光行の娘は、貴道にとたい、本礼に 新でわり、叔又孝貞は道室之間の感の現命に最たところから、集室時、 の皆伝達してたい、首都備装砂」には重宝時長と協力して二十回道	
	(中マ (作者) 当員: およびは定かではないが、様々な読がある。主な説は以下の通りで 単原好が着した『後然年』には前の信道守の行長という人が出家し 地界が着した『後然年』には前の信道守の行長という人が出家し たとある。その原生仏は「東国のもの」だったので、弓馬のことは、 に取材して書いたと言われている。 期の文字者。時長の訳母は平時忠夫人であり、安徳天皇の乳化でも、 なよこ)で、使え弟に下野守中山行長を持つ、低闘寺根恩院でつく なる『屋籠稿抄』(国町時代初期の成立と推定)には、東京時長が展近 二十回巻本の『平家物助』をつくったといわれている。また、中山: 行長と同一人物であるという気もある。 研究や歌人として知られる字者。光行の娘は"美遺局"と本し、雄礼『 男でなり、叔文孝真は国堂道御の敬の発息に居たたころから、東窓時) の情報に通じていた。『龍籠神妙』には東京時長と協力して二十回巻 をつくったといわれている。	C 総立臣 テーマ (1987にス・10
	一マ【作書】 居員: およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りで、 田泉好が着した「役然取」には前の信道守の行長という人が出席し、 窓門の役類により平家の範囲をつくり、それを盲目の経営と感・生、 たとある。その原生仏は「環題のもの」だったので、弓馬のことは、 に致れて雪いたと言われている。 期の文字者。時長の駅母は平時忠夫人てあり、安陽天象の乳료でも。 なねこ」で、従足弟に下野守中山行長を持っ、低闘寺根恩院でつく「 る「置職種材」(或町中代羽肉のななと相思)には、頭家時長が吸い 二十四巻本の『平家物題』をつくったといわれている。また、中山 行長と同一人物であるという致もある。 弱元やな人としていあられるや者、光行のぬは「装真師」と非し、雄杠 男でなり、仏文手貞は塩之道の吸の現場に居たところから、属室時1 の情報に当ていた。「宿職補材」には重弦時長と協力して二十回巻 奪くころとしいれれている。	
	一マ【作書】 居員: およびは定かではないが、様々な読がある。主な説は以下の通りで: 田泉好が寄した「役然取」には前の信濃守の行長という人が出席し 窓門の役勤により平家の動脈をつくり、それを盲目の経営と時、生 たとある。その原生仏は「環題のもの」だったので、弓馬のことは: に致れて雪いたと言われている。 期の文字者。時長の駅母は平時忠夫人であり、安防天急の乳化でもう なねこ)で、従足弟に下野守中山行長を持つ、藍陶寺県盛でつく) る「置職精材」(或町中代羽肉のななと相恋)には、東京時長を死気) 二十四巻本の『平家物語』をつくったといわれている。また、中山 行及と同一人物であるという気もある。 第25ペマ人としていあられるや常、人行の頃は「実真時"と称し、雄杠 例であり、叔父半貞は塩之道の吸の現場に居たところから、東室中) の皆範に当ていた。「範囲納材」には重意時長と認力して二十回巻 歩つくったといわれている。 「古記(きっき)」の作者である様大納雪藤原起形は、仕妻に平福盛 えていたが、廉原夏毎紅屋類の孫であり、のちに豊子になった。第 行らがつくった二十回巻本の『平家納話』とは刻に十二巻本「平家」 っと「前期材」に記名れている。	C 報志紙 テーマ (1987-ス・マイ)     展長::      ・・仲容(周時)らなのか、それともおう(79)のか?      やられた     マスを広かっ、それが自然を定えたも、名を持わとされている。     マスをことかっ、それが自然を定えたものではな、と思われている。     ・・仲容が自らのなから PBSRD のなから PBSRD のなから PBSRD のなかた PBSRD のなかまで 100 年近くの休用     ていることがっ、それが自然を定えたものではな、と思われている。     ・・仲容が自たな、と思われている。     ・・仲容が自たな、と思われている。     ・・仲容が自たのではな、と思われている。     ・・仲容が自たのではな、と思われている。     ・・仲容が自たのではな、と思われている。     ・・仲容が自たのではな、と思われている。     ・・仲容が自たのではな、と思われている。     ・・仲容が自たのではな、と思われている。     ・・仲容が自たのではな、としていたいたのではな、その何容が知ら PBSRD のなかたら PBSRD のなかたら PBSRD のなかた PBSRD のなかか PBSRD のなかか PBSRD のなかか PBSRD のなかか PBSRD のなかた PBSRD のなかか PBSRD PBSRD NACE A CONTENT A PBSRD PBSRD NACE A CONTENT A PBSRD PBSRD PBSRD NACE A CONTENT A PBSRD
	*一マ(作着) 損損: およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りで、 自然が考した「我然取」には前の信着守の行長という人が出意しい 準円の援助により平家の物語をつくり、それを盲目の発琶法師・生 たとある。その間些仏は「原国のもの」だったので、弓馬のことは、 になれて客いたき言われている。 第の文学者。時長の収得は平時空中山行長を持つ、質顯寺根拠現でつく、 る「醍醐補抄」(室町時代初期の成立と指定)には、質証時長が派式、 十日巻本の「草家物助」をつくったといわれている。また、中山 行長と同一人物であるという気もある。 研究や歌人として知られる学者。先行の娘は笑真信と本し、真正 時代に通じていた。「醍醐補抄」には繁立時長と這カして二十回差 をつくったといわれている。 「言記(を)っち)の作者である様大術言語取経所は、後妻に平経盛 えていたが、藤原要基は塩房の紙であり、のちに貴子になった。集計 行ちがつくった二十回巻本の「平家物助」とは別に十二巻本「平家 のよと「電鶴構抄」に記念れている。 日件録』には、常常為長が12巻本の平家物語を書き、性仏(生仏)	
	*一マ (作者) 送員: およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りで、 規算が若した『使然取』には前の信道守の行長という人が出家し 意用の援助により平家の物面をつくり、それを盲目の延程前の、丈 たとある。その歴生仏は『原題のもの』だったので、弓馬のことは: に取材して書いたと言われている。 別の文字者、俳奏の秋日は平時忠夫人であり、安徳天皇の乳色でも、 むねこ)で、従兄弟に下野守中山行長を持つ、置顧寺根恩院でつく「 る 『置顧頼林辺』(国町時代初期の成立と推定)には、東京時長が現代 二十四巻本の『平家物語』とつくったといわれている。東宮時 何であり、奴父卒員は塩之語の吸の現仏に告たところから、東宮時 行長と同一人物であるという説もある。 研究で教人として知られる字者。光行の頃は「満員時"と本し、雄北「 男であり、奴父卒員は塩之語の吸の現仏に告たところから、東宮時 そのくったといわれている。 「言恕(そっき)」の作者である様式納言音原題形は、後妻に平穏超 そつくったといわれている。 「言恋(そっき)」の作者である様式納言音原題形は、後妻に平穏盛 行らぶつくった二十四巻本の『平家物語ととは知に十二巻本「平家 うた』「面顕純特」に記されている。 日井鶴具には、罪原為長が12巻本の平家物語を含き、住仏(生仏) 谷紀松正称・最一の族を做ている。為長は上型門・現地・後祖門	
	一マ【作着】	C 報志語 テーマ (1981-2.171)     BE:     C 報志語 テーマ (1981-2.171)     BE:     **(特別::#Sixtan)、 それともおう(19,55)(*     **(特別::#Sixtan)、 それともおう(10,55)(*     **(特別::#Sixtan)、 それともおう(10,55)(*     **(特別::#Sixtan)、 **(*Sixtan)、 **(*Sixtan) **(*Sixtan), **(*Sixtan) **(*Sixtan), **(*Sixtan) **(*Sixtan
	*-マ(作着) 居員: およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りで、 趣房が寄した「我然取」には前の信着守の行長という人が出家し 違用の援助により平家の物話をつくり、それを盲目の経琶迷師・生 たとある。その際些仏は「原題のもの」だったので、弓馬つことは、 になれて 客いたと言われている。 期の文字者。時長の妖母は平時を失れてあり、安浩天泉の乳母でもi がねこ)で、既見恥に下野守中山行長を持つ、質闘寺根思院でつく る「醞醐純枝」(室町時代初期の成立と推定)には、裏室時長を新聞火 二十四巻木の「苹果物画」をつくったといわれている。また、中山 行長と回一人物であるという気もある。 研究や泉人として知られる学者。光行の娘は"英娘町"と非し、違礼『 男であり、双文孝貞は違之間の吸の寒島に居たたころから、集空時 の皆報に通じていた。「魔闘純枝」には裏室時長と協力して二十四巻 をつくったといわれている。 1行起 (さっさ)」の作者である様大納言語原経形は、後妻に平経感 えていたが、藤原要基は基別の孫であり、のちに美子になった。難 行ちがつくった二十四巻木の「平家物語」とは別に十二巻木「平梨」 ったと「鶴鶴焼」に記えれている。 日件録」には、雪原為長が12巻本の平家物語を書き、性仏(生仏) 5種植師・最一の族を優世でいる。為長は"上町門・現題、佐根阿 天色のち代にたかり特徴として仕たえた家様本。	
	*-マ(作着) 居員: およびは定かではないが、様々な説がある。主な談は以下の通りで、 単分がが着した『使然取』には前の信濃守の行長という人が出家し 進円の扱物により平家の物態をつくり、それを各目の延髪使師・生 たとある。その際生仏は「原面のもの」だったので、弓馬のことは、 に載材して書いたと言われている。 別の文字者。毎年の状母は平時空丸に分支や着な、原簡等視想院でつく る「置離機材」(或町時代知県の成立と指定)には、裏弦時長が現代 二十四巻本の『空寒物語』をつくったといわれている。また、中山 行長と同一人物であるという説もある。 研究や取人として知られら等者。光行の娘は、実道時で、 の情報に通じていた。「置翻練材」には繁盛時長と協力して二十回 方でわっ、秋火率炎は増立。四の吸火薬に居たところから、繁盛時: の情報に通じていた。「置翻練材」には繁盛時長と協力して二十回 そつくったといわれている。 「言記(きっき))の作者である様大前言道原延展別は、後妻に平幅超 そつくったこ十回巻本の『平家物語を含ま、性仏(生仏) ろぜを読みを記をしていた。「算鋼練材」には営本の「平家物語を含ま、性仏(生仏) ろ様を読むれている。 「非常していたまれている。 「非常していた」「環境系長な」認者がの平家物語を含ま、性仏(生仏) ろ様を読むれている。 「言記(きっき)」の作者である様大前言語原延展り、後妻に平幅超 たった」「中国参加」には、四方山(電話)の子女たち、舞坊) 大道 使服の体の書書比丘形、桜町「中納言成職、仁和寺の) 入道使源、使習の体の書書にたに、桜町中納言成職、仁和寺の	
	*-マ(作着) 居員: およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りで、 趣房が寄した「我然取」には前の信着守の行長という人が出家し 違用の援助により平家の物話をつくり、それを盲目の経琶迷師・生 たとある。その際些仏は「原題のもの」だったので、弓馬つことは、 になれて 客いたと言われている。 期の文字者。時長の妖母は平時を失れてあり、安浩天泉の乳母でもi がねこ)で、既見恥に下野守中山行長を持つ、質闘寺根思院でつく る「醞醐純枝」(室町時代初期の成立と推定)には、裏室時長を新聞火 二十四巻木の「苹果物画」をつくったといわれている。また、中山 行長と回一人物であるという気もある。 研究や泉人として知られる学者。光行の娘は"英娘町"と非し、違礼『 男であり、双文孝貞は違之間の吸の寒島に居たたころから、集空時 の皆報に通じていた。「魔闘純枝」には裏室時長と協力して二十四巻 をつくったといわれている。 1行起 (さっさ)」の作者である様大納言語原経形は、後妻に平経感 えていたが、藤原要基は基別の孫であり、のちに美子になった。難 行ちがつくった二十四巻木の「平家物語」とは別に十二巻木「平梨」 ったと「鶴鶴焼」に記えれている。 日件録」には、雪原為長が12巻本の平家物語を書き、性仏(生仏) 5種植師・最一の族を優世でいる。為長は"上町門・現題、佐根阿 天色のち代にたかり特徴として仕たえた家様本。	
	*-マ (作着) 居員: およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りで、 国委好ぶ等した T後然取】 には前の信着守の行長という人が出度しい 準円の援勢により平家の物面をつくり、それを盲目の発琶法師・生 たとある。その際生仏は「原国のもの」だったので、弓馬のことは? に取れして書いたと言われている。 別の文字者。神長の秋田は平寺忠夫へてあり、安徳天皇の乳母でもう なねこ」で、従見県に下野守中山行長を持つ、西蘭寺根思院でつく る「随欄維勢」(室町中代初期の成立と指定)には、景道時長が現代 一十四巻本の「宝字物助乱」をつくったといわれている。また、中山 行長と同一人物であるという説もある。 研究で教人として知られら寺者。光行の娘は"貴道時"と作し、単れ 行長と同一人物であるという説もある。 研究やみ、ペノを実体は意之間の後の現象に完たところから、集空時 の皆幅に通じていた。「醍醐維勢」には繁重時長と協力して二十回避 をつくったといわれている。 「言記(きっき)」の作者である様大前言庫原紙所は、後妻に平極頭 くていたが、羅家裏私は整測の研究やあり、のちに貴子に平確認 えていたった。「健都神経」には繁正時長は、低妻に平極顔 たった」「青塚新長な」に登水の「平家物語」とは刻に十二巻本「平家 大い子の傍聴として仕た大文章博士。 い一下字家敬友見には、(借名)、「二 (確原正題)の子女たち、即ち 入遺俊慧、使星の体の書想比丘尼、縦町中納言成紙、仁和寺の) たちが「前平家物語」とも言うべき物面を執張したという伝来 いろ。	C 総立振 テーマ (特別について)
	一マ【作着】 置書: およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りで 田娘好が着した「役然取」には前の信道守の行長という人が出家し 期内の提知により平家の範囲をつくり、それを盲目の経営と声・生 たとある。その原生仏は「道国のもの」だったので、弓馬のことは、 に致材して書いたと言われている。 期の文字者、時長の板田は平時を決大てあり、安防天急の乳化でも、 なねこ)で、従兄弟に下野守中山行長を持つ、醍醐寺相思院でつくづ る「置幅解散り」(協可時代初房の成立と指定)には、東京時長ろ頃代、 二十四巻本の『平家物風』をつくったといわれている。また、中山に 行長と同一人物であるという気もある。 研究や零人としていあられる字本、人行のぬはて残良時ごと称し、東北げ 房でわり、叔父手貞は塩之部の吸の現場に居たところから、東部長う の竹塚に通じていた。(宿翻解除り」には東京時長と協力して二十回選 あてったといたれている。 「吉記(きっき)」の作者である場大納雪値印経防は、後妻に平福県 えていたが、海原実経は塩原の紙であり、あ長は上切り、頃道・役場下 するかろくのたって本の話を大約雪値距差防は、後妻に平福県 えていたが、海原実経は塩原の紙であめ、のちに発子になった。第 行きがつくった二十回巻本の「平家物風」とは力切に十二巻本「平家」 ったと「顧解解除り」に起されている。 日件最」には、智家為友は、「自天」「孫原通別」の子女たち、即ち) 入道夜里、慶徳の娘の意思比丘尼、戦町中特が成成、仁和今の 入道夜里、慶徳の娘の意思比丘尼見、戦下中特式成れ、たわいうの ためい「前平家物風』とも言うべき物語を執筆したという伝承・ いる。	C M2HE デーマ [198:23.17]     MR5:      ···/198:395:04,000. それとも終う時期のかから 1888年 のたから 1888年 0885787300000000000000000000000000000000
	*-マ【作着】 居員: およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りで、 田族好が寄した「役然取」には前の信着守の行長という人が出家し、 窓門の援助により平家の物話をつくり、それを盲目の経営法師・生 たとある。その滞坐仏は「原題のもの」だったので、弓馬のことは、 に致れて書いたき書かれている。 期の文字者。時長の妖母は平時を失れてあり、安語天泉の乳母でも。 なねこ」で、従足弟に下野守中山行長を持つ、飯田寺根拠夜でつく、 る「置陽解読好」(G町時代別の伝改と社想)には、黒葉時長が感じ、 二十四巻本の『平家物語』をつくったといわれている。また、中山! 行長と同一人物であるという気もある。 研究や歌人として知られる卒者。光行の娘は"愛真町"と称し、違礼『 男でなり、奴犬卒食は道之間の吸の恐境に最たたころから、集空い の情報に通じていた。「原期論読り」には重重時長と協力して二十回巻 をつくったといわれている。 うだと、(1)のような事。 先のの頃にないた。「第回論読り」には重重時長と協力して二十回巻 たつくたといわれている。 日待起しば、町変み最近辺のできり、のちに発子になった。重新 行らがつくった二十回巻本の『平家物語』とは対い十二巻本「平家 かと言「回顧読好」に思たれている。 日待起しば、一環意義起気の後できり、のちに発子になった。重 行らがつくたこ十回巻本の「平家物語」とは対い十二巻本「平家 たらが「前平家物語』と自うべき物語を発展したという伝承・ いる。 明行気だという説が最有力である。それはその根拠である『技術範疇」 は『授然取』が平家物語のよこついて語った文献中、成立年次が明、	
	一マ【作着】 「「「「「「」」 およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りで 回娘好が着した「役然取」には前の信道守の行長という人が出家し 即の役類により平家の範囲をつくり、それを盲目の経営と声・生 たとある。その原生仏は「道道のもの」だったので、弓馬のことは、 に致れてておいたと言われている。 別の文字者、時長の板田は平時を決大てあり、安浩天急の乳化でも、 なねこ)で、従兄弟に下野守中山行長を持つ、銀〇寺和恩説でつくづ る「置幅解散り」(協可時代初房の近立と指定)には、東京時長ろ頃気、 二十四巻本の『平家物風』をつくったといわれている。また、中山 行長と同一人物であるという気もある。 研究や零人としていあられる字本、人行のぬは"実真町"と称し、雄北 房でわり、叔父手貞は塩之部の吸の現場に居たところから、東部会 現代やなるという気もある。 第二十四巻本の『平家物風』とは大郎活動の長く協力して二十四巻 多てったといかれている。 「言記(きっき)」の作者である様大納言語原題形は、後妻に平福県 えていたが、海原実施証と超初の死であり、みちに当時に二十二巻本「平家 ったと「銅解酸坊」に起きれている。 日待起しには、智家為板三十四巻小瓜」とは別に十二巻本「平家 ったと「銅解酸坊」に起きれている。 日待起しには、智家為板三本の新長を加め一、頃巻、後期下 実施のち代にわたり特談として仕えた文章博士。 ちい『青平家物風』とも言うべき物語を執筆したという伝承: いろ。 明行長だという説が最有力である。それはその根拠である『後然取』	C M2H テーマ BMBにス・1     MR:     C M2H テーマ BMBにス・1     MR:     ·································
	*一マ【作着】 居員: およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りで、 田族好が寄した「役然取」には前の信着守の行長という人が出家し、 窓門の援助により平家の物話をつくり、それを盲目の経営法師・生 たとある。その滞坐仏は「原題のもの」だったので、弓馬のことは、 に致れて書いたと言われている。 期の文字者。時長の妖母は平時を失れてあり、安語天泉の乳母でも。 なねこ」で、従足弟に下野守中山行長を持つ、飯田寺根拠だつく、 る「置陽解読好」(G町時代別の伝改と社想)には、黒葉時長が感じ、 二十四巻本の『平家物題』をつくったといわれている。また、中山! 行長と同一人物であるという気もある。 研究や歌人として知られる辛者、光行の娘は"愛真郎"と称し、違礼『 男でなり、奴犬卒食は塩之間の吸の寒島に最たたころから、集空い の情報に通じていた。「原期論読り」には重重時長と協力して二十回巻 をつくったといわれている。 うだと、(1)のためできか、外行の娘は"愛真郎"と称し、違礼『 学なかっ 奴犬卒食は塩気の必要急に最たたころから、集空い たちんざい、羅原賞題は塩原の後間としたころか。「集空い たちんず」「即う人」のため、「日本参加」とは別に十二巻本「平和 見から作さいり待然としてはたた文な物子、 ちい『「単家物取過」とは言うべき物語を発展したという伝承、 いる。 明行気だという説が最有力である。それはその根拠である「決法範疇」 は「「従たね」」が平家物語のなこついて語った文献中、成立年次が明、 こので見かった。」ので言いた文献中、成立年次が明、	C 低と低 テーマ (P(B)について)     服用:     **作用の時にななか、それともおうではなか?     作作品の時にななか、それともおうではなか?     作作品の時にななか、それともおうではなか?     作作品の時にななか、それともおうではなる、     **作品の時になったい、     **作品の時になったい、     **作品の時になったい、     **作品の時になったい     **作品の時になったい     **作品の時になったい     **作品の時になったい     **作品の時になったい     **作品の時になったい     **作品のものなか、     **作品のものなのは、     **作品のものなか、     **がの     **がの
	一マ【作書】 居員: およびは定かではないが、様々な読がある。主な説は以下の通りで 田族好が着した「役然取」には前の信意守の行長という人が出席し 認用の役勤により平家の動脈をつくり、それを音目の経歴と時、生 たとある。その原生仏は「道国のもの」だったので、弓馬のことは、 に放射して当いたと言われている。 期の文字者。時長の訳母は平時ま夫人であり、安勝天魚の乳母でも。 なねこ」で、従足弟に下野守中山行を待つ、質勵寺根思定でつく る「冒難解散り」(或甲門代羽肉の位立と出意)には、「裏 頭時長を振り、 二十四巻本の『平家物語』をつくったといわれている。また、中山 行長と同一人物であるという説もある。 研究や零人としていあられるや常、光行の値に"実真問"と称し、雑紀 男でなり、ひょひあられるや常、光行の値に"実真問"と称し、雑紀 男でなり、ひょひあられるや常、光行の値に"実真問"と称し、単和 男でなり、ひあられるや常、光行の値に"実真問"と称し、単和 男でなり、のにあられるや常、光行の値に"実真問"と称し、単和 見ていたが、種原質数は認思がの形ちまで、のちに豊子になった。第 行ちがつくった二十回巻本の『平家物話』とは幼に十二巻本「平家 の着種述師・最一の族を做ぜている。為長は土即門・現徳・規制で 実品らなにたわたり待款として出たえな草博士。 ちい『資料平教物語』とも言うべき物語を発展したという伝承、 いろ。 明行長だという説が最有力である。それはその視気であり「社然都正 は『提然取』が平家物語地について描い頃心と真識をもっている。	C 報2年 テーマ [298:52.10]     REF:     C などから、その特徴を始またもないる 国際発展したないたら 開始期 の成立まで100 年近くの特別     C などとから、その特徴を始またもないなる     C などとから、その特徴を始またもないなる     C などとから、その特徴を始またもないてる。     C などとから、その特徴を始またもないてる。     C などとから、その特徴を始またもないてる。     C などとから、その特徴を始またもながれている。     C などのから、ためたとされている。     C などのから、ためたとないたいる。     C などのから、ためための     C などのから、     C などのからなどとしていたんやかな、日本のからないからがたい     C などの     C などのからなどとしていたんやかな、日本のからないからがたい     C などの     C などの     C などのから、日本の     C などのか     C などのか     C などのからなど、シンロをがからがなど、シンロをがから、日本の     C などの     C などの     C などの     C などのか     C などのか     C などの     C などのか     C などの     C などの    C
	*一マ【作着】 居員: およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りで、 田族好が寄した「役然取」には前の信着守の行長という人が出家し、 窓門の援助により平家の物話をつくり、それを盲目の経営法師・生 たとある。その滞坐仏は「原題のもの」だったので、弓馬のことは、 に致れて書いたと言われている。 期の文字者。時長の妖母は平時を失れてあり、安語天泉の乳母でも。 なねこ」で、従足弟に下野守中山行長を持つ、飯田寺根拠だつく、 る「置陽解読好」(G町時代別の伝改と社想)には、黒葉時長が感じ、 二十四巻本の『平家物題』をつくったといわれている。また、中山! 行長と同一人物であるという気もある。 研究や歌人として知られる辛者、光行の娘は"愛真郎"と称し、違礼『 男でなり、奴犬卒食は塩之間の吸の寒島に最たたころから、集空い の情報に通じていた。「原期論読り」には重重時長と協力して二十回巻 をつくったといわれている。 うだと、(1)のためできか、外行の娘は"愛真郎"と称し、違礼『 学なかっ 奴犬卒食は塩気の必要急に最たたころから、集空い たちんざい、羅原賞題は塩原の後間としたころか。「集空い たちんず」「即う人」のため、「日本参加」とは別に十二巻本「平和 見から作さいり待然としてはたた文な物子、 ちい『「単家物取過」とは言うべき物語を発展したという伝承、 いる。 明行気だという説が最有力である。それはその根拠である「決法範疇」 は「「従たね」」が平家物語のなこついて語った文献中、成立年次が明、 こので見かった。」ので言いた文献中、成立年次が明、	C M2E テーマ (MSC2.VC)     MR::      C M2E テーマ (MSC2.VC)     MR::      · ・ (MSDESAGO)、それともがうないたの「    MR::      · ・ (MSDESAGO)、それともがうないたい、「    MR::      · ・ (MSDESAGO)      · ・ (MSDESAGOO)      · ・ (MSDESAGOOO)      · ・ (MSDESAGOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO
	*-マ(作名) 居員: およびは定かではないが、様々な説がある。主な説は以下の通りで、 単一の後かぎした「秋然取」には前の信着守の行長という人が出家し 準一の後かぎした「秋然取」には前の信着守の行長という人が出家し 準一の後かぎした「秋然取」には前の信着守の行長という人が出家し なたとある。その際些仏は「原面のもの」だったので、弓馬っことは、 になおしてないたき言われている。 第の文字者。時長の妖母は平時空歩人であり、安浩天泉の乳母でもi がねこ」で、従足弟に下野守中山行長を持つ。「飯田寺根肥炭でつく る「醋硼酸炒」(室町時代初期の成立と推定)には、葉道時長が新聞 大日巻来の「草家物画」さつくったといわれている。また、中山 行長し一人物であるという気もある。 研究や泉、人として知られる学者。光行の娘は"英濃局"と非し、撞礼「 男でなか。双く声爽は塩室の吸の寒島に居たたころから、葉空かり、 の皆ない通じていた。「鹿酮酸炒」には葉蜜時長と協力して二十回差 をつくったといわれている。 1行起(さっさ))の作者である様大納言語原紙形は、後妻に平磁超 えていたが、藤原要最は基面の低であり、のちに発子になった。難計 「ちがつくった二十回巻林の丁字家物語と言さたろから、葉空か ったと「陶鋼助」に記まれている。 日件録」には、雪原為長が12巻本の丁家物語を書き、性仏(生仏) ろ種植師・最一の族を載せている。為長は土地門・現想、使趣同 天色のち(にわたり侍徳法)に仕たえた太宮様土、 ち・「草家融友録」には、信酒入道(福原道室)の子女たち、即ち 入道便道、使輩の妹の題恵比丘思、桜町中始言成範、たわ寺の たちが「前平家物画」とも言うべき物語を映筆したという伝来いいる。 明行長だという説が最劣力である。それはその視聴である『往然取』 れを記述した娘好法師が言能について酒のた文焼中、成立年次が明 れを記述した娘好法師が言能について酒い間心と食種をもっていう 20月 20日、 第名・二日の「	
	*-マ (作名) 居員: およびは定かではないが、様々な説がある。主な談は以下の通りで、 国委が多慮した 冒然意取」には前の信着守の行長という人が出度し、 定用の扱わぶをした 冒然意取」には前の信着守の行長という人が出度し、 定用の扱わぶをした 冒然意取」(以属のもの)だったので、弓馬のことは? に取けして書いたと言われている。 別の文字者。神長の秋田は平神忠夫人であり、安徳天皇の乳色でとし、 なわして、従見県に下野守中山行長を持つ、面積寺根思院でつく る 『置編編録抄』(国町中代初第の成とと指定)には、裏途時長が現代 一十日巻本の「三家物語見 さっくったといわれている。また、中山 行長と同一人物であるという説もある。 研究で吸人として知られら寺者。光行の娘は"貴道町"と作し、基化 行長と同一人物であるという説もある。 研究で吸人として知られら寺者。光行の娘は"貴道町"と作し、基化 行きた一人物であるという説もある。 研究で取人として知られら寺者。光行の娘は"貴道町"と作し、基化 行きた回一人物であるという説もある。 研究でな人として知られら寺者。光行の嬉し"貴郎"となから、雪志 行きだ (きっき)」の作者である様大納言確原経期は、後妻に平福道 をつくったといわれている。 「言記 (きっき)」の作者である様大納言確原経期は、後妻に平福道 そつくったこ十回巻本の「平家物語」とは刻に十二巻本「平家 行きがつくった二十回巻本の「平家物語」とは刻に十二巻本「平家 行きがつくった二十回巻本の「平家物語」としてはたた文意味 行らがつくった二十回巻本の「平家物語」の子女たち、即ち 八百歳勤はには、信名の道面」の子女たち、即ち 小百余 「平家勤を」には、信名の道、「個子」の」の本書である「秋秋郎」 にする」には、信名の道 の子女たち、即ち 入道使慧。が平家物語(とっついて属った文献中、成立年次が明 れを通じたがう意が、青石である。大社その根拠である「秋秋郎」 れを述した葉が指示が貴徳について属い信とと真違をもっている」 現念は、昭名・葉者・出版社、サイトの連念は、サイト名・作成者 なったいろの場合	

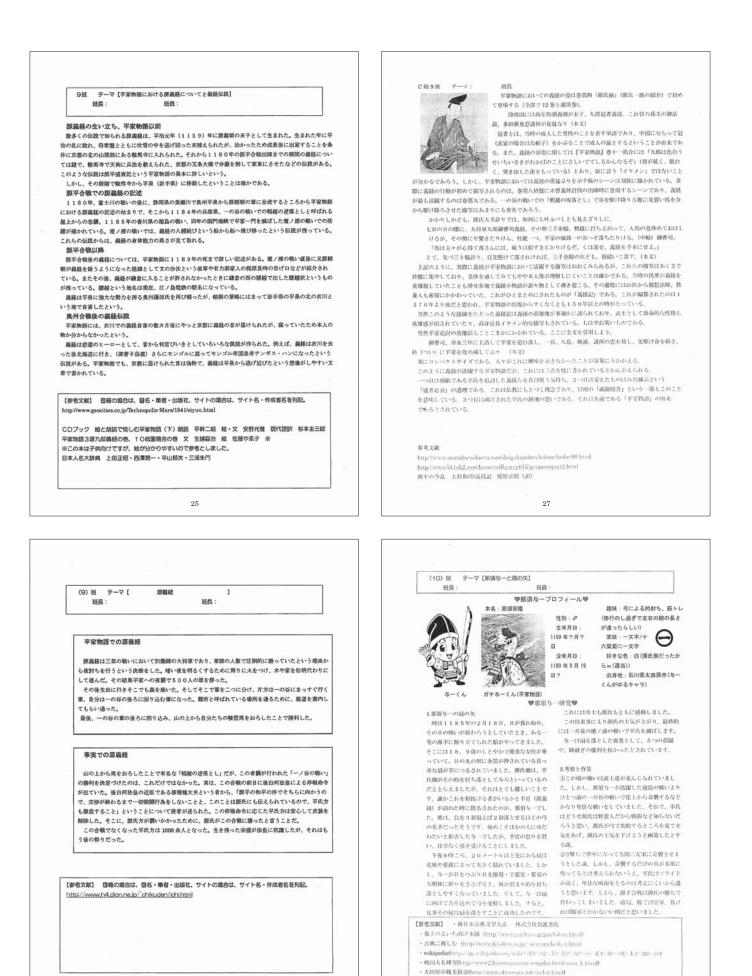
	4班 テーマ [平白ふょうふょうふょ]
3班 テーマ【諸本~諸本とは?主な系統やその特徴など~】	雌長: 雌員:。
班長: 班員:	
「諸本」に関して複数の辞書では次のように出てくる。大辞林 第2版では「同一の作品で本文の性質や	
内容の異なる諸種の写本や刊本の総称。」日本国話大辞典 精選版では「さまざまな本。特に、いっ	伴奏として琵琶を弾きながら「平家物語」の調章を語り聞かせる語り物音楽。「平家琵琶」ともいい、最近
たん成立した書物が、その後作者自身あるいは享受者その他による改変や誤写などによって、部分的	は、音楽種別名称としては「平曲」、楽器種別名称としては「平家琵琶」ということが多い。
こ異同を有する数種の伝本を生じたときそれらを総称していう。」広辞苑 第5版では「①もろもろ	起源
D書物」「②原点批判の対象としての、ある文献の稿本・写本・版本などの総称。」と出ている。	「徒然草」の記事によれば、鎌倉時代の初期に信濃前司行長が世を捨てて比叡山の慈円の保護を受けた頃
これらのことから、多くの辞書ではいわゆる昔の物語を伝承していく際に発生する書き間違いなど	関東出身の盲人生仏と協力してまとめ上げたという。行長には罹薬、慈円には天台声明、生仏には盲僧琵琶 案襞があったと思われ、その三種の音楽が平曲の顕流をなしている。その後、有力者の保護を受けたりして
と言われる。	素養かめつたと思われ、その三種の音楽が平面の読品をなしている。その後、有力者の保護を受けたりして 5世紀にかけて黄金時代を迎えたが、次第に渡退していき、明治以降は伝承者がごく少数となった。
· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	「平家物語」の各意が平台の一曲にあたり、全体は200曲からなる。これは、初期の平台の内容から次
「平家物語」の伝本と言えば現存するもの7、80種と数えられる。その諸	に増補されて増えていったものである。現状では衰減す前ではあるが、鎖曲や浄瑠璃などに与えた影響は大
本問題に果敢に立ち向かう専門家は倉間するものの、その整理作業は困	く、音楽史上の意義は大きい。
世となっている。	
略本語の時間では、「「「「」」」の「」」の「」」の「」」の「」」の「」」の「」」の「」」の「」」	
ー方流系統(灌頂巻型 覚一本·菜子十行本·流布本等)は南北朝頃に	
名人明石覚一が出て、台本を定めて以降栄えて続いた。	
だが、八坂流系統(断絶平家型 歴代本・百二十句本・平松家本・竹柏園本・鎌倉本・中院本・園民文庫本・奥村家本	
第)の方にはそのような才腕家が出なかったため、副座整理出来ないほどに広がった。	
RA RA	
南都本・原平開即録・四部合戦状本 のように数々の異本も生み出さ	
$h \in [h]$	
略本の逆である広本としては延慶本・長門本・源平盛衰記があげら	
at the strange of the state the	
特徴	
。 『平家物語』には、数多くの諸本が存在する。そして、大きく分けて「読み本系」と「語り本系」の2つがある。	【参考文献】 田籍の場合は、田名・筆香・出版社、サイトの場合は、サイト名・作成者名を列記。
また当時は、本は手で書き写していたため、諸本(=異本)が発生していた。それゆえに、諸本の数は 70~80 種類とも	
まわれている。	C C
といっても、現在おもに使われている平家物語は覚一本である。古典の教科書に載っていたり、本屋で売られていたり	
する平家物語のほとんどがそうである。	
えーというのは、明石覚一という南北朝時代の琵琶法師のことである。なぜ覚一本が主であるのかというと、当時覚一	
が、自分の死後に、ロで語り継がれている平家物語についての論争になると考え、平家物語の定本を作ったからだ。	
9	11
(3)班 テーマ(基本(ショボ〜ン) ) 現長: 近員:	11 (4)班 テーマ ( 平曲 ) 班長: 班員:
<ul> <li>(3) 班 テーマ【線本(ジョボ〜ン) 】</li> <li>         ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・</li></ul>	(4) 班 テーマ[ 平曲 ]         班長:       班員::         班曲について       I         「 平曲とは       平曲にった「平家物語」のメロディおよびその演奏構成で、物語語種のひとつ。         近世に成立した編集整整や実践整整でも「平家物語」に取材した曲が多数作曲されているが、音楽的にはまった「平家物語」に取材した曲が多数作曲されているが、音楽的にはまったく別のもので、これらを平曲とは呼ばない、平家物語を語る歌詞、そしてメロディーのことを平曲という。         I 平曲の歴史
<ul> <li>(3) 班 テーマ【諸本(ショボ〜ン) 】</li> <li>         ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・</li></ul>	(4) 短 テーマ [ 平曲 ] 現長:
<ul> <li>(3) 班 テーマ(基本(ショボ〜ン) 1 ・</li></ul>	<ul> <li>(4) 班 テーマ[ 平曲 ] ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・</li></ul>
<ul> <li>(3) 班 テーマ(基本(ショボ〜ン) 1 ・</li></ul>	<ul> <li>(4) 班 テーマ [ 平曲 ] ・</li></ul>
<ul> <li>(3) 班 テーマ (基本 (ショボーン) 1 辺長: 辺長: 辺長:</li> <li>1) 読まとは 両一の作品で、改変や顔記などによって具なる箇所のある、写本・刊本の総称、複数の人々が同時多 契約に伝えたため、他の言典特徴よりも多く50 頓見上の該本が生まれたといわれています。</li> <li>(2) 蓮本への着 平家物語の選本はたくさんありますが、分類することができます。基本の分類を始めたのは、山田季 超数取で大きく分けて2つに分類されました。それが増り本売して、読み本系は大き、二十年、日本人 巻の夕蜀 平家物語の選本はたくさんありますが、分類することができます。基本の分類を始めたのは、山田季 超数取で大きく分けて2つに分類されました。それが増り本売して、読み本系は大き、二十年、日本人 巻の本系・大学の最は多くの場合、語り本系の倍近い分類があります。現在平家物語のもの っとも有名な選本として広く知られているのは語り本系の使一本というものです。</li> <li>(3) 話り本系 代表的なものは4つほどある         ・受ー本 取める平家物語語をか中で、現在、もっとも一数的に読まれているのが定一本で、他の 潜本に比べ構成に無数がなく、文芸的列油度が最も高いといわれています。         ・使われています。         ・ 通れ本 細われ奈和原本を考慮したと言われるほど広まっていま した、その数は二十種類以上に及びます。         ・ 通れ本 細われ奈和美の主体の構成に加速がなくのはまつ         ・ 「の者に一種類以上に及びます。         ・ ・ 日本本 最大を調査の超本で、「原始平家」型十二巻の各巻を十切(十零)に分けるため この名で呼ばれています。         ・         </li> </ul>	<ul> <li>(4) 班 テーマ [ 平曲 ] ・</li></ul>
<ul> <li>(3) 班 テーマ (諸本 (ショボ〜ン) 1</li></ul>	(4) 短 テーマ[ 平曲 ]            ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
<ul> <li>(3) 班 テーマ(基本(ショボーン) 1 近長: 近長: 10月:</li> <li>(1) 読本とは 同一の作品で、夜菜や顔記などによって異なる箇所のある、芽木・刊本の総称、複数の人々が同時多 契約に伝えため、他の古典物語よりも多く50 電以上の読本が生まれたといわれています。</li> <li>(2) 誰本の分類 平家物態の課本はたくさんありますが、分類することができます、誰本の分類を始めたのは、山田幸 複数形で大きく分けて2つに分類されました。それが語り本系と読み不紊したさんき、山田幸 複数形で大きく分けて2つに分類されました。それが語り本系に読み不満に大きた違 いがあります、筋り本系が十二巻ではぼぼ意しているのに対して、読み本系に大き、の二ときたな いがあります、筋り本系が十二巻ではぼぼ意しているのに対して、読み本系に大き、二・長、四十八 巻など巻数は様々で、本文の品は多くの感念、語り本系の倍近い分量があります。現在平家物語のも っとも常本な様本をして広く知られているのは語り本系の覚ー本をいうものです。</li> <li>(3) 語り本系 代表的なものは4つほどある ・夏本本 昭和初期に至るまで『平家物語』といえば読本本を指したと言われるほど広まっていま した。その数は二十種類以上に及びます。     ・ ・ 細い本 昭和初期に至るまで『平家物語』といえば読本を相したと言われるほど広まっていま した。その数は二十種類ないに及びます。     ・ ・ 細い本 昭和初期に至るまで『平家物語』といえば読本を相したと言われるほど広まっていま した。その数は二十種類ないに及びます。     ・</li> <li>(4) 読み本系 作本と同系紙の課本で、「原他平家」型十二巻の各巻を十句(十零)に分けるため この名で呼ばれています。     ・</li> <li>(4) 読み本系 都本本 職本の書の読み本系テキスト、平家物語成立時の古簡を伝えるといわれ、近年研究者 の前で最もは目を集めるテキストです。     ・</li> </ul>	(4) 班 テーマ ( 平曲 ) 出長: 送員: 平曲について I 平曲とは 平曲にないた處理整理や変調整理でも「平案物語」に取れした曲が多数分曲されているが、音楽的にはま たく別のもので、これらを平曲とは呼ばない、平案物語と記載れた曲が多数分曲されているが、音楽的にはま たく別のもので、これらを平曲とは呼ばない、平案物語を語る敬淵、そしてメロディーのことを平曲という。 I 平曲の歴史 まず、平案物語の成立の歴史についてみていきたいと思う。 平案解題の成立については、世熱某業ニョニーナパ酸の記しているところが、最も早く、かつ詳しいものとして知っ れている。 「後鳥物院の障碍、信濃前時行気、稽古の智ありけるが、無奈の関語集の時によられると、昭和名をたつ忘れた ければ、五郎の記者を実命になった。きう考察にして、外国をすてい意思したりけるを、認識的の、平美教 者をは、下語までものしをきて、不便にやさせ始れば、出生国み試異を扶助におり、北京人道、平安物語 で、生命といいたな書目に低大かたらせけり、きて、山門のことをことにからしくがける、和約可定の年(4月)
<ul> <li>(3) 班 テーマ (基本 (ショボーン) 1 辺長: 辺長・ 辺長: 辺長・ コーの作品で、改変や領記などによって異なる箇所のある、写本・刊本の総称、複数の人々が同時多 契約に伝えたため、他の言典物語よりも多く50 領以上の意本が生まれたといわれています。         </li> <li>(2) 国本の分割 平家物語の選本はたくさんありますが、分類することができます。基本の分類を始めたのは、山田季 超数形で大きく分けて2つに5例言されました。それが溜り本売よ医み本売で、この2つには大きな違 いがあります。語り本売が十二巻でほぼ国達としているのに対して、読み本礼た寺、二十巻、四十八 歩びためくわけへきびになったかられているのは語り本売の倍近い分量があります。現日本不 歩びためのなく、加られているのは語り本売の倍近い分量があります。現在平案物語のも っとも有なな選本として広く知られているのは語り本売の使えい分割がます。現日本で、他の 基本に比べ構成に無数がなく、文芸的可能度が最も高いといわれています。         </li> <li>(3) 西り本売 代表的なものは4つはどある         <ul> <li>・見一本 数ある平家物語語をいゆで、現在、もっとも一般的に認まれているのが定一本で、他の 基本に比べ構成に無数がなく、文芸的可能度が最も高いといわれています。               </li> <li>・ そ本 昭和初期に基本さす「軍家物語話」といえば武都本を相したと言われるほど広まっていま</li></ul></li></ul>	(4) 班 テーマ ( 平曲 ) 出長: 近員: 平曲について I 平曲とは 平曲にないた確認をなったらをすめましくは一派発様式、自自の発想法的が疑想をかきゆらしない ら通った「平家物語」のメロディおよびその演発構成で、物語覚想のひとつ。 近世以降に成立した確確発展や変調登題でも「平家物語」におれした曲が多数分曲されているが、音楽的にはま- たく別のもので、これらを平曲とは呼ばない、平家物語を語る説別、そしてメロディーのことを平曲という。 I 平曲の歴史 まず、平家物語の成立の歴史についてみていきたいと思う。 平家物語の成立については、後述常道:コニーナパ酸の記しているところが、最も早く、かつ詳しいものとして知っ れている。 「後希知院の時時、信濃前時行気、積古の智ありけるが、最後の時になったもの。 一葉及 者をは、下部までものしをきて、不便にやさせ始ければ、此度違み見をすい。最近有法が見み道、平容物語の、一葉及 者をは、下部までものしをきて、不便にやさせ始ければ、此度違み見を見い続けり、此行見み道、平容物語で、
<ul> <li>(3) 班 テーマ【離本(ショボ〜ン) 1 ・</li></ul>	(4) 短 テーマ[ 平曲 ]            ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
<ul> <li>(3) 班 テーマ (継本 (ショボーン) 1</li></ul>	<ul> <li>(4) 班 テーマ [ 平曲 ] ・</li></ul>
(3) 班 テーマ (基本 (ショボーン)       1         班長:       近日:         1) 班本とは       同一の作品で、改変や観記などによって異なる箇所のある、写本・刊本の総称、複数の人々が同時多 売的に伝えたため、他の言典物語よりも多く50 電以上の誰本が生まれたといわれています。         2) 国本の分類       平家物語の課本はたくさんありますが、分類することができます、基本の分類を始めたのは、山田孝 趣教授で大きく分けて2つに分類されました。それが語り本系と読み本系に大考、し、中本         第本の分類       平家物語の課本はたくさんありますが、分類することができます、基本の分類を始めたのは、山田孝 趣教授で大きく分けて2つに分類されました。それが語り本系と読み本系に大考、モート、日本へ         ※ 日本へ       小さの活動でもつに対して、読み本系に大考、モート、日本へ         ※ など巻数は様々で、本文の最は多くの場合、語り本系の倍近い分類があります、現在平家物語のも っとも考るな語本として広く知られているのは語り本系の登一本というものです。         (3) 暦り本系       代表的なものはよく、ためられているのは語り本系の登一本というものです。         (4) 野本系       代表的なものはよりになく、ためられているのは語り本系の登一本というものです。         (5) 暦り本系       代表的な自体に見知がなく、文芸の判実達が知られるいと言われるほど広まっていま した。その数は二く種類以上に及びます。         ・日本本       転や市家店面の写え、         ・日本本       単本語の表しています。         ・日本本       単本目示表の伝の写え、         ・日本本       単本式を見示表がした。         ・日本       単本式を見示表では、         ・日本本       単本式 日本の表したいます。         ・日本       単本式 日本の表の構成で、「服金や家」 当本での表をもやり(十零)に分けるため この名で呼ばれています。         ・日本       単本の表の書かるテストです。         ・日本       単本の最いたの読みを示表すれる。         ・日本       単本の表の方本ストです。         ・日本       単本の表の方本ストです。         ・日本       単本の表の方本ストです。         ・日本       ●本本長大の表の方本ストです。         ・日本       ●本の表示本大	(4) 短 テーマ[ 平田 ]
(3) 班 テーマ(課本(ショボヘン)       1         磁長:       三日         1) 課本とは       同一の作品で、改業や情紀などによって異なる箇所のある、写本・刊木の総称、複数の人々が同時多 安約に伝えたため、他の古典物語よりも多く 50 幅以上の課本が生まれたといわれています。         (2) 課本の分類       デ案物語の課本になくさんありますが、分類することができます。課本の分類を始めたのは、山田孝 課教授で大きく分けて2つに分類されました。それが国り本系と読み本系で、002つには大きな違いがあります。明み本系が十二番ではぼ間違しているのに対して、読み本系は六巻、二千巻、四十八 巻など巻数は探々で、本文の設計多くの組合、当り本系の倍近い分品があります。現在年実物語のも っとも有名な課本として広く知られているのは語り本系の食ー本というものです。         (3) 期り本系 代表的なものは4つほどある       ・夏ー本         ・夏ー本       数ある不実物語様本の中で、現在、もっとも一般的に読まれているのが第一本で、他の 誰本に比べて構成に意味がなく、文芸的所違皮が最も高いといわれています。         ・20 本本       昭和初期に置るまで『平家物語』といえば武市本を相したと言われるほど広まっていま した。その数には一様観以上に及びます。         ・最本に、「新か正義自然の考末、 ・ 面かる最高を読み考示。       ・日本         ・20 本本       昭和初期に置るまで『平家物語』といえば武市本を相したと言われるほど広まっていま した。その数に二く構成に意味の示な。         ・21 本数の表示表示の示       ・「新本を発展しのたきわれるほどなまっていま した。その数に二者類の以上えびます。         ・21 本数のならのは4つ       ・「「御祭不家」」量十二巻の各巻を十句(十年)に分けるため この名で呼ばれています。         (4) 読み本系 の間で成しは自た良かるテキストです。       ・「御子 離れのなこのというれ、近年研究者 の間で成しは「意知る」といった読みが高の一具本。 本、意志ならら大本が多い。         ・22 本数数目を使いた実内も前北海内や行初期に関東地方で成立した読み本系平安物語の一具本。       ・「御子 取りたことからえまれの一具本         ・23 年間課題       単会ならた成か本系でなる」と読み本系で成立した読み本系平安教師の一具本。         ・24 本4 ねる 48 色巻に及る、算本中在もたた成のに読み本系の一具本。       ・         ・33 年間の課題       単会的で大式の合い、       ・         ・34 本4 和目を見の読み本系平安本人に認知がの説か本系の一具本。       ・          ・35 本4 本4 長くあるう大本系が多い。       ・           ・	(4) 班 テーマ[ 平曲 ] 出長: 近員: 中田について I 平曲とは 平曲にこういてて I 平曲とは 平曲にないた爆撃歴や気気装置でも「平家物語」に取れした曲が多数分曲されているが、音楽的にはま たく別のもので、これらを平曲とは呼ばない、平家物語と謳る切割、モレてメロディーのことを平曲という。 I 平曲の歴史 まず、平教MEMの成立の歴史についてみていきたいと思う。 平物物感の成立については、使想尊第二百二十大成の記しているところが、最も早く、かつ詳しいものとして知 たいる。 ReARMONGHM、信意の智慧のいたが、その可能が出たが、日本の利益を影響のまたのであれた。 たん、変換の思想がよった何になったいまた」、「一般の知識の時にのされて、その利益をいちの体 たれば、玉織の兄童でしたでなくいたうたいと思う。 日 中国の歴史
<ul> <li>(3) 班 テーマ(線本(ショボーン)</li></ul>	(4) 短 テーマ[ 平田 ]
<ul> <li>(3) 班 テーマ(線本(ショボーン)</li></ul>	(4) 班 テーマ[ 平曲 ] 出長: 近員: 中田について I 平曲とは 平曲にこういてて I 平曲とは 平曲にないた爆撃歴や気気装置でも「平家物語」に取れした曲が多数分曲されているが、音楽的にはま たく別のもので、これらを平曲とは呼ばない、平家物語と謳る切割、モレてメロディーのことを平曲という。 I 平曲の歴史 まず、平教MEMの成立の歴史についてみていきたいと思う。 平物物感の成立については、使想尊第二百二十大成の記しているところが、最も早く、かつ詳しいものとして知 たいる。 ReARMONGHM、信意の智慧のいたが、その可能が出たが、日本の利益を影響のまたのであれた。 たん、変換の思想がよった何になったいまた」、「一般の知識の時にのされて、その利益をいちの体 たれば、玉織の兄童でしたでなくいたうたいと思う。 日 中国の歴史
<ul> <li>(3) 班 テーマ (諸本 (ショボーン) 1 田田:</li></ul>	(4) 班 テーマ( 田田 )           出日:         近日:           出日:         近日:           二         四日:           二 <t></t>
(3) 班 テーマ (継本 (ショボーン)       1            近長:          近長:          1         1         1	(4) 班 テーマ( 田田 )         出日:           出日:           二           山田:           二           二           二           二           二           二           二           二           二           二           二           二           二           二           二           二           二           二           二           二           二            二             二             二             二             二             二
<ul> <li>(3) 班 テーマ (諸本 (ショボーン) 1</li></ul>	(4) 照 テーマ[ 四曲 ]           1 班話: 1 現前:           第二日の日のいて           1 平由とれ           1 平由とれ           1 中山とは           1 中山とは           2 中山とは           2 中山とは           1 中山とは           2 中山とは           2 中山とは           2 中山のとし           1 中山のとし           2 中山の思史           2 中山の思想をしっしいたりをしたりやしたりをしたりまりまりましましましましましましましましましましましましましましましましま
<ul> <li>(3) 班 テーマ(線本(ショボーン)</li></ul>	(4) 班 テーマ[ 田田 ]            ・ 班長::::::::::::::::::::::::::::
<ul> <li>(3) 班 テーマ (線本 (ショボヘン) )</li></ul>	(4) 班 テーマ[ 田田 ]           1 班品:         1 班品:           1 平曲とこ         1 日本に           1 平曲とこ         1 日本に           1 平曲とこ         1 日本に           1 中国とこ         1 日本に           1 中国とこ         1 日本に           1 中国とこ         1 日本に           1 中国のた         1 日本ののた           1 日本ののたのた         1 日本ののた           1 日本ののたのたのた         1 日本ののた           1 日本ののたのたのた         1 日本のた           1 日本のた         1 日本のた           1 日本のた

(4) 近 テーマ ( 平 曲 ) 近長: 近日:	(5) 班 テーマ【琵琶法師 いつ?どうやって?どんな人 】
	班長: 班員::
. そもそも平曲とは 鎌倉時代中期から後期にかけて、琵琶法師と呼ばれる目の見えない間によって平家物語は琵琶を弾きながら	発琶法師とは、平安時代から見られた、琵琶を街中で弾く盲目の間である。琵琶を弾くことを職業とした盲
oれた。この「平家物語」というのは徳川県以降に庶民の読み物として定着した後に定着した名であり、当	僧の装人で、平安時代中端におこり、語った盲僧たちは比叡山ゆかりの琵琶法師たちであった。琵琶法師に使
単に「平家」と呼ばれていた。つまり、平家を歌って語ったものが「平曲」というのである。	われる琵琶は笹琵琶とよばれる比較的単純な琵琶と標準に用いられる伝統的な楽琵琶それらを折衷させたもの だったらしい。盲僧琵琶は仏教儀式に用いられたもので
「「」「」「」」「」」「」」「」」「」」「」」」	につたらしい。自己発達はAbbileXに用いられたもので 発琶法師の弾き語りは、中国から平安時代以前に来た声楽の発琶楽(盲僧発琶、宗教音楽)に当たる。宗教1
- そについては諸説あるが、一説には 13 世紀初め、雅楽・声明・盲僧苑琶の三者を源流として成立。また	楽としての盲値発琶を担った。なお、盲人の琵琶法師(盲筒発琶)から宗教性を脱した語りものを「くずれ」
些然草』には信濃前司行長と生仏という盲僧の協力で鎌倉時代の初めころつくられたとあるが、その成立を	
ぐっては多くの異説がある。約100 年後の南北朝時代になると、検权明石覚一 という名人が現れて詞章・曲 こ改良を加え、現行のような形に整えたとされる。これから室町時代が平曲の最盛期。江戸時代も幕府の保	平家物語の弾き語りは鎌倉時代に起こった。また、このとき、主として基文を唱える盲僧琵琶と、『平家物 話』を語る平家琵琶とに分かれた。『平家物語』の語り本は、当道座に属する盲目の琵琶社師によって琵琶を1
に改良を加え、現行のような物に数えたとされる。これが5回5mm+100平面の放金所。127-47(5年初の9床 により三味線の流行にも駆逐されず、とくに徳川家光は平曲を愛好して彼多野流と前田流を開かせた。両流	きながら語られた。これを「平曲」と呼び、物語秘密の一つである。
学んだ荻野知一検校は『平家正節』という譜本をつくり、今日まで前田流の規範譜である。明治に入ると当	
保護の政策が廃止され、波多野液は離村性海の死により事実上断絶。一方、前田流は平曲に熟心であった準 審にも伝わり、藩士館山衞之逃は1910年、『平家音楽史』を著した。1955年に国の選択無形文化財に選択さ	平曲は、音楽史的には、盲僧琵琶の一つで、声明のなかの語り部分である「課式」の大きな影響を受けて継 時代中期に成立し、楽琵琶を採用している。また、これは平曲が生れたのは、通説とされている「後然章」の二
層にも広わり、層工語山南之通は1910年、1千米百米文』をもした。1900年に回り通いかのスピール回りで 保護の対象となっている。	六段に書かれているものによれば、12世紀の末頃鎌倉時代に藤原俗遺前司行長という公卿の作った物語を、天
色々な平家物語が伝わっているが、平曲は『平家物語』の各章を一曲として数え、全 200 曲余。秘事は	宗の仏教歌謡の曲開によって生仏という東国生まれの盲僧が語った事によって始められたとされている。発見
小秘事」の二曲と「大秘事」の三曲。これは総検校にのみ伝授され、一生に三度しか演奏しないほどの秘曲 して尊重された。当初は三巻であった巻数もだんだんと増え、現在は全十二巻に推頂巻が加わった「覚一本」	法師の中には、乞食同然の者もいて、語り物を語って諸国を漂治し、笹延智とはばれる比較的単純な延習を供 っていたと考えられているが、盲官という官職を授けられて、詩歌管弦をこととする者もいたのである。生仏
して非重された。当初は二巻であった老板もためためと増え、実生は主「二老に能はそのかかしったった」 最も有名。異本には、全二十巻の「長門本」、全四十八巻の「原平盛衰泥」などが知られている。「硫酸精合の蟾	はそのような盲官であったと思われる。
a、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛客必衰の理を表す」という冒頭の文章で分かるように、仏	盲菌が琵琶を弾くようになるのは、任明天皇の子人康親王が盲目となり、ほかの盲菌にも琵琶を教えるように
の「無常」という考えが主題になっている。	なって以来といわれている。鎌倉時代初期には、そのような琵琶語師が多数存在していた。生仏もそのような 琵琶法師の一人だったと思われる。これは後世のすべての語り物の元祖であることに歴史的価値をもち、室町
3. 曲の構成	時代に足利尊氏の定護を受けて全盛期を迎え、江戸時代には三昧線音楽に抑えられたが、幕府の保護で命服を
平曲の1章は、曲節とよばれる類型的な部分の組合せでつくられている。曲節は約50種、主要なものは	保った。
種ほど。それぞれ音階・音程・リズムが異なり、合級描写では「拾」の曲節というように調章の内容などと	そもそも「平家物語」という古典文学作品は、元来は琵琶という楽器を伴奏として語る、語り物の音楽の詞章で、 った、平家物語という名称自体、徳川時代以降に定着したものであり、当初は単に平家と呼び、その語りを平
現連がある。その詞章や曲節は、平曲以後の能、浄瑠璃、地歌箏曲などに多大な影響を与えた。 平曲に用いる平安琵琶は、雅楽の楽琵琶よりやや小さく、四弦玉柱。柱と柱の間を押さえて猿奏する。撥は	った。平原物語という名称目体、地川時代以降に定着したものであり、当初以単に平泉と呼び、その曲りを平 ともいっていたのである。そして、平曲を語る者を平家語りというようになったのであった。
「面に加いる平家混邑は、福家の来記目は、「いいい」、日本には、ほとにつめとれてには知いり、「記日」	語り物としての「平家物語」を『平家琵琶』といい、略して平家とも言われ、現在では、ふつうには『平曲』とい
t「口説」の前では「口説撥」のように続く曲節によって決定されている。	n3.
4. 参考文献	【参考文献】 母親の場合は、母名・筆者・出版社、サイトの場合は、サイト名・作成者名を列記。
ч. ♥ ラスm 平家琵琶ホームページ <u>http://homepage3.nifty.com/heikebiwa:arao/</u>	
Y曲と平家物語(鈴木孝廣著、知泉書館)	
r曲と平家語り(平家物語の成立と琵琶法師たち) <u>http://japanese.hix05.com/Narrative/heike01.html</u> B本大百科全書(小学館)	
「本人日午主要(「F子師) 東平語島合戦 http://www.e-yashima.jp/yoshitune/yoshitsune/heike.htm	
10	
13	15
(5)紙 テーマ(課題法師 ) 	
班長: 班長: 当員: 基礎を作弊にして叙事時を語った盲目の法師形の意能準。7世紀末ころに中国より伝表した発程は還元の合 25年数実践三の雑任婦丸が百日となってお飯いにはんだが、そのもとに原時間が三年間通って秘密を伝説さ 26巻数を載する。戦力は琵琶法師の祖とされ、観顯常第四の島子という伝承を生むが一方数らの自指組織とで いうべき当道ではて同天島第四島子人厳選足を祖仲とし天気巻くして祭る。戦逸した小右記には、寛和元年 智慧術等者して、丁業を尽くしき占めたことが認られていた。新聞会別にあるか 5、平安時代に家事時を語って、活躍したことは違かである。議会時代に軍記物語が生まれると彼らは平家物	<ul> <li>(5)超 テーマ [ 琵琶法師 ] 超長: 送員:</li> <li>         選載: 送員:</li> <li>         選題:         電力:         </li> <li>         国の広くて、平安時代や用におこった         日本の定ちたらされたから良時代志にび下空時代に信         らされた場楽の超躍集(温集、変構音傘)と、それと同時代ないしそれに先んじてもたらされた声楽の超醒集(富備温醒、深細         音楽)との 2つがある:         電算量:         電論:         電会:         「会会:         「留意:         「会会:         「</li></ul>
<ul> <li>         ・          ・         ・</li></ul>	<ul> <li>(5)超 テーマ [ 琵琶法師 ]</li></ul>
<ul> <li>         ・          ・         ・</li></ul>	<ul> <li>( 5 ) 班 テーマ [ 琵琶法師 ] 出長: 送員:</li> <li>         歴課法師 (ひわほうし) は平安時代から見られた、短毬を何中で導く首目の信である。延毬を導くことを視案と た官目信の定人で、平安時代や廃におこった     </li> <li>         田本の課題は、古代のアジア大島よりもたらされたのであるが、その系統には、中国から奈良時代および平安時代によ らされた場本の整理集(領集、芸術音楽)と、それと同時代ないしそれに先んじてもたらされた声楽の理理集(省集、芸術音楽)と、これと同時課題を整合した。なん、百人の躍躍法師(首像理EE)、卵 音会とのマングある<sup>3</sup>、翌醒走師師は、後者に高し、宗教音楽としての官僚課題を担つた。なね、百人の躍躍法師(首像理EE)、 から宗教性を脱した選びの学家に合わせて語る平命が完成したべ、この時代には、生として東文を切え、 宿鐘理怪と、『下家物語』を握る中安理想とに分かれた。疑惑法師のなかには「浄瑠璃十二段早子」など説話・認識 むを取り入れる者があり、これがのちの浄瑠璃となった     </li> <li>         ふっとも有名な「理理法師」といえば、小泉八雪の怪談で知られる「耳なし汚っ」の情報に、単に本文なな少び出されて基地 いて平安物語」を描る中安理想とに分かれた。疑惑法師のないには「浄瑠璃十二段早子」など説話・認識 むを取り入れる者があり、これがのちの浄瑠璃となった     </li> <li>         ふっため言などのうに取えた登録さつけて含を隠したものの、唯一軽文を書きされた耳を思わ いたつぶりようを良く保留するものだ。         著者によれて、「私国」のはじまりは「モノ国」と読みを目的に見ましたい見法でいた。 記ののはじまりは「モノ国」」、すなわち花花着の意気が感じたった。世界は、ましくで離話の原語の がたして、きまざまに語られた。あるときは意識を解集のら付きの深意発きるの実施となった。世界は、ましくで語の原語の がたして、きまざまに語られた。あるときは意識を解解したの高い付きの深葉発きとし、そのあときは違語を得知の言いまう         からした、きまざまに語られた」の自己である。         「書を知るの言い意見の言いまからかけきの深ま発きし、「たまして、「教師の原語の がたして、きまざまに語られた。あるときはなどの</li></ul>
<ul> <li>         ・ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一</li></ul>	<ul> <li>(5)超 テーマ ( 疑疑法師 )</li></ul>
唐代:   Fright:   Fri	(5) 別 テーマ [ 脱型:
田県:  ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	<ul> <li>(5)超 テーマ ( 疑疑法師 )</li></ul>
田長:   田長:   日日:   日日: <p< td=""><td>( 5 ) 班 テーマ [ 2005 ] 近長: 2015 ] 近点: 2015 ] 歴史: 2015 ] EEEE: 2015 ] EEE: 2015 ] EE: 2015 ] EE: 2015 ] EE: 2015 ] EE: 201</td></p<>	( 5 ) 班 テーマ [ 2005 ] 近長: 2015 ] 近点: 2015 ] 歴史: 2015 ] EEEE: 2015 ] EEE: 2015 ] EE: 2015 ] EE: 2015 ] EE: 2015 ] EE: 201
据長:   一提供:   日間:   日本ののでは、「おおい」」、「おおい」」、「おおい」、「おおい」、「おおい」、「おおい」、「おおい」、「おい」、「	( 5 ) 班 テーマ (
歴史	( 5 ) 班 テーマ [
服長: 「「」」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」 「」」 「」」 「」」 「」」 「」 「」」 「」 「」 「」」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「」 「 」 「 」 」 「 」 」 「 」 」 「 」 「 」 「 」	(5)超 テーマ( 脱胚語 ) 近長: 近日: 近日: 近日: 短期: 短期: 短期: 短期: 短期: 短期: 短期: 短期
<ul> <li>         ・          ・         ・</li></ul>	(5)) 紙 テーマ[ 脱藍師 ]
<ul> <li></li></ul>	( 5 ) 照 テーマ [ 腔壁 ]
田野     田     田野     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田      田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田     田	(5)) 紙 テーマ[ 脱藍50 ]

6班 テーマ ( 全体のあらすじ ) 組長: 組員:	(7) 班 テーマ【便ケ谷事件について】 班長: 班員:
-,(1(*))(-,	
平家物語といえば、冒頭の「紙園精金の娘の声・・」は有名である。しかしながら、その全体のあらす じについては一般に知れ渡っていないのではないだろうか。	この事件を調べた動機
そこで私たちら斑は、「登場人物」「起水転線」「時代背景」の3つの視点から平京物語の全体のあらすじ についてまとめた。このレポートが皆さんの平家物語の理解の一助となれば辛いである。	平承物語では、この鹿ケ谷事件は平家打倒の動きの最初のものと位置付けられていて非常に重要だと考えた から。また、宿臨に捕まったそれぞれの人たちの行動がそれぞれ異なりユニークで面白いから。
主尔登场人物	
■清盤  完盛の子。保元の乱、平治の乱などで活躍し、従一位太政大臣にまで至る。しかし次第に周囲からの反	事件の概要
心室がう。米儿がれ、干冶がれるとしゃねじ、父―は人気にとしてきる。こかしんかに周囲がちがん が高まり、諸国の源氏が蜂起する中で熱病死する。	鹿ケ谷事件とは後白何法皇の近臣が平氏打倒を金てた陰謀事件である。1177年、後白河法皇の近臣である、 藤原成親、西光、俊寛が中心となって京都東山、鹿ケ谷にある俊寛の山荘で謀職を企てたことが始まりで、後
6根朝 6根朝の息子。次第に勢力を広げ、木曽義仲、平氏を滅ぼし、征兵大将軍に任じられた。鎌倉尋府の基礎	確示式後、日元、彼足が中心となうく水形水は、死りがわめる後近が出まく構成をまてんことながなりくい に多田行綱の密告により清盛の知るところとなり関係者は描えられ処分された。
と築いた。 原表経	平家物語における廃ケ谷事件のエピソード
8夜軸 1額朝の息子。宿士川の合戦、木曽義仲との合戦や平氏追討の一谷、屋島、墳浦の合戦にことごとく	・ 検査の山荘で、鹿ケ谷事件の関係者たちが集まって宴会をしていたとき、藤原成親がふと立ちあがったとき
\$利する。頼朝との不和から反振を翻すが、没厚して吉野から奥州に逃れる。	に前に聞いてあった瓶子(徳利のこと。「へいじ」と読む)を倒してしまった時、平氏と瓶子をかけて「平氏
起承极结	倒れた」と言って喜んだ。
(半部(基1~6)では、平家一門の病陸と栄華、それに反発する反平家勢力の真謀などが語られる。平家 浩島の他になって大きな発躍をみせるが、椎勢を掌握した清盛はやがて患行の限りを尽くすようになる。	<ul> <li>         ・          ・</li></ul>
「酒飯の世になって大きな秋鐘をみせるか、相男を半住した市路はでかした行が取りを示くすようになる。	相応だ」と言い返し、怒った清盛に惨殺された。
、源頼朝。木曽義仲が挙兵し、その騒然とした情勢のなかで清盛が死んでしまう。	<ul> <li>事件の首謀者ともいえる藤原成親は平重盛と縁或関係にあったので、平治の乱のときには清盛と敵対して数</li> </ul>
le事部(巻7~12)は、源氏勢の進攻と源平合戦、そして平家の減亡が主に描かれている。。まず信濃で兵を 『た木曽義仲が都に向かって快速撃を開始し、これにより平家は都を捨てて西海へ逃れ去る。しかし、都	れたが重盛のおかげで命を助けられた。鹿ケ谷事件でも重盛の助命嘆願によっていったんは偏前国への液理に なったが、結局配流先で非葉の死を遂げた。導の入った酒を飲まされたとか、それを拒否したために崖の上が
12.不管裁押が単に同かって快速事を困想し、これにより平米に単と信くて自冷へ回れ云る。しかし、単 )した義仲は、後自河法皇との確執から東国の情朝の介入を招き、東国勢の猛攻を受けて滅び去る。一方、	ら尖った杭を並べた竹林に突き落とされたとも言われている。
◎義仲を撃ち破った東国勢は、一ノ谷に拠る平家の攻略に立ち向かう。 ここから源平の対戦となり、一ノ	<ul> <li>・法勝寺という大きな寺の寺務職をしていて、何百人もの従者を従えてぜいたくな暮らしをしていた俊寛は、</li> </ul>
星島と敗北を重ねた平家は長門の増ノ浦に追い詰められ、安徳天皇は祖母二位尼に抱かれて入水、一門 ※はここのあたオストレント、た	配流先の鬼界が島で漁民に物乞いをして生きる立場になってしまったことに耐えられなくなり、違に食を絶って命を終えた。平家物語の語り手はこの投寛の没落の原因を位の高い借として他入に奉仕されながら借として
半はここで自決することとなった。	の務めを怠ったためだとしている。
時代 鶯 景 : ず、諸提あるが大体平家物語の成立は 1190 年から 1218 年の約 30 年間くらいだといわれている。その 50	まとめ
この、「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」	平家物語ではこの事件を平家没落の予兆として語っていると同時に、斬首された西光や流罪になった俊寛。
t立で始まり、源氏と平氏も巻き込んで発生した保元 · 平治の乱にともに勝利した平氏は驟済力 · 軍事カ	ど事件の関係者の没落の原因を現世での感行の報い、つまり因果応報に求めている。その点において、この者
R暦的に増大させ、清盛は武士で初めて公家になる。こうして芽やかな平氏政権が始まる。しかし「平家 bらずんば人であらず」と言うようにおごり高ぶった平氏は多くの者に憎まれ都落ちするのである。その	件は平家物語においての仏教思想を理解するうえで、重要な役割を持っているといえるだろう。
どんどん追い詰められ、増ノ浦で源氏に滅ぼされてしまうのである。おごり高ぶった平氏が落ちぶれてい	
5 6 鮮明に記したものがこの平家物語なのである。	【参考文献】 登輝の進合は、豊名・康君・出版社、サイトの進合は、サイト名・作成者名を列記。 ・平家物語(一)校注者 梶原正昭・山下宏明 発行者 山口昭男 岩波魯店
考文献]	・日本史大事典 平凡社
3年(1957) 半手法的语言 游戏者道。	・戦争の日本史6源平争乱 上杉和彦 吉川弘文館
(决论20月1日本,与古典主论上13 平文和达3 1-37位)	<ul> <li>平家物語のあらずじと登場人物(平家物語完全現代語訳) 竹内みちまろ</li> </ul>
17	
	19
(6) 班 テーマ [平孝物語全体のあらすじ] 班長: 祖員:-	7班 主な地名・戦場・史跡
班長: 胡貴: 物語は、天永元年 (三二) 三月、平清盛の父に当たる平忠遥が界級を許されるところから始まる。	
班長: 班員: 朝鮮は、天承元年 (三二) 三月、平清盛の父に当たる平忠遠が昇散を許されるところから始まる。 上がりを戦落とそうとする貴族を忠盛はうまくかわし、そのうえ息子の清盛も出世明道を突き抜けた。	7班 主な地名・戦場・史跡 <sup>要長: 要員:</sup>
班長: 班員: 物語は、天承元年 (→→三二) 三月、平清盛の父に当たる平忠遂が界級を許されるところから始まる。	7班 主な地名・戦場・史跡 要長: 要員: 石礦山の戦いで山中に改定した頼朝は歳の親原祭時に見つかる6. 景時はこれを見逃した、これにより、の
班長: 班員: 物語は、天承元年(一一三二)三月、平清磁の父に当たる平忠遥が昇級を許されるところから始まる。 上がりを戦落とそうとする常装を忠盛はうまくかわし、そのうえ息子の清盛も出世明道を突き抜けた。 後も、親族を利用して反応分子の芽を摘みながら力を着えていった平氏は栄華を誇るようになる。 《調子付く平楽>> の余葉に潜れたのか、清盛は、侍らせていた紙王という白拍子(男装し舞をする遊女のこと)を、別の白	7班主な地名・戦場・史跡 展長: 展員: 不順山の戦いで山中に敗走した頼朝は敵の照開景時に見つかるも、登時はこれを見逃した、これにより、の ちに景時は頼朝に追用される、土肥のしとどの箇がこの逸話にまつわる伝殿の地として伝わっている。
班長: 班員: 物語は、天永元年(一一三二)三月、平清盛の父に当たる平忠盛が昇級を許されるところから始まる。 上がりを戦害とそうとする貴族を忠處はうまくかわし、そのうえ息子の清盛も出世街道を突き抜けた。 後も、親族を利用して反乱分子の芽を描みながら力を着えていった平氏は栄華を誇るようになる。 3月付く平家> の実第に潜れたのか、清盛は、侍らせていた紙玉という白拍子(男族し舞をする道女のこと)を、別の白 である仏に気が移ったせいで追い出してしまうという事件を起こした。しかも仏も無常を感じ紙王ととも	7 班 主な地名・戦場・史跡 歴史: 歴員: 不適山の戦いで山中に政定した報報は敵の関原戦時に見つかるも、数時はこれを見逃した。これにより、の ちに気勢は時間に通用される、土匠のしとどの道がこの送返にまつおる伝展の地として伝わっている。 趣氏の武者・銀谷道実が顔を提していると、沖へ逃げている平氏の武者を見つけたので、戻ってくるようき びかけた。武者は跡へ引き返し道実と組むが、直実は強くとても最わなかった。直実は首を取ろうとするが、
班長: 班員:   前話は、天栄元年(一一三二)三月、平清盛の父に当たる平忠盛が昇級を許されるところから始まる。   上がりを職席とそうとする貴族を忠遠はうまくかわし、そのうえ息子の清盛も出世街道を突き抜けた。   後も、親族を利用して反乱分子の芽を積みながら力を着えていった平氏は栄華を誇るようになる。   3番子付く平家つ の学業に満れたのか、清盛は、傍らせていた紙玉という白拍子(男装し舞をする遊女のこと)を、別の白 である仏に気が移ったせいで追い出してしまうという事件を起こした。しかも仏も無常を感じ紙玉ととも   此を好る姿に身をやつしてしまうのであった。	7 班 主な地名・戦場・史跡 展長: 歴島: 不確山の戦いで山中に改走した頼朝は敵の視察策時に足つかるも、策時はこれを見逃した。これにより、の ちに気時は頼朝に追用される、土地のしとどの道がこの改話にまつわる石限の地として伝わっている。 際にの成者・服谷道実が強を提していると、神へ逃げている平氏の武者を見つけたので、既のでえるよう びかけた。虎背は強へ引き返し道実と知むが、盛実は強くとてく続わなかった。意味は着を取るうとするが、 のの実者は道実の急子と盛が這いい事だった。隣れに思い遠がそうとするが、他の親氏の武者が追っていて見
班長: 班員:   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、	7 班 主な地名・戦場・史跡 
班長: 班員:   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・ <p< td=""><td>7 班 主な地名・戦場・史跡 展長: 展員: 不確山の戦いで山中に改走した頼朝は戦の視察景時に見つかるも、景時はこれを見進した。これにより、4 ちに景時は頼朝に追用される。土地のしとどの資かこの逸話にまつわる伝説の増として伝わっている。 際にの読者・儒谷道実が描を提していると、神へ通げている平氏の武者を見つけたので、現みに がわけた、虎背は跳へ引き返し直実と組むが、武以出後くとてく続わなかった。面実は話をを取ろうとするが、 なの武者は直要の急子と虚が近い少年だった。僕れに思い遠がそうとするが、他の順氏の武者が迫っていては</td></p<>	7 班 主な地名・戦場・史跡 展長: 展員: 不確山の戦いで山中に改走した頼朝は戦の視察景時に見つかるも、景時はこれを見進した。これにより、4 ちに景時は頼朝に追用される。土地のしとどの資かこの逸話にまつわる伝説の増として伝わっている。 際にの読者・儒谷道実が描を提していると、神へ通げている平氏の武者を見つけたので、現みに がわけた、虎背は跳へ引き返し直実と組むが、武以出後くとてく続わなかった。面実は話をを取ろうとするが、 なの武者は直要の急子と虚が近い少年だった。僕れに思い遠がそうとするが、他の順氏の武者が迫っていては
田県: 田県: 「新師は、天栄元年(一一三二)三月、平清磁の父に当たる平忠場が算機を許されるところから始まる。 上がりを戦害とそうとする貴族を忠處はうまくかわし、そのうえ息子の清盛も出世街道を突き抜けた。 長く、親族を利用して反応分子の芽を積みながら力を苦えていった平氏は栄華を誇るようになる。 調子付(平家> の実際に指れたのか、清盛は、待らせていた紙玉という自拍子(男装し舞をする遊女のこと)を、別の白 である仏に気が多ったせいで追い出してしまうという事件を起こした。しかも仏も無常を感じ紙玉ととも 生を好る姿に着をやつしてしまうのであった。 ち、米能の前先か、皇室においても、二条天気と後白何法気が親子でありながら借みあっていた。しかも 天気は前代の放迎衛天島の最后を所望し、強引に入内(内核に入みこと)させてしまった。しかもそんな 足名も、病により若くして命を決ってしまい、本の次代に第年2歳の六条天皇が破いた。そして二条天皇 責で事件は起こった。葬儀の参判で興福寺の恶街道が比較山の厚送に乱入したのである。怒った比較山の	7 班 主な地名・戦場・史跡 
班長: 班員:   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・   ・	7 班 主な地名・戦場・史跡 班王 照見: 西山の戦いで山中に敗走した朝朝は数の程原発時に見つかるも、景時はこれを見逃した、これにより、むした寒時は頼朝に直用される。土尼のしとどの首がこの逸話にまつわる伝説の地として伝わっている。 既の成者・患谷直然が城を抱していると、沖へ逃げている平氏の次者を是つけたので、原ってくるようがいかけた、武者は違うの心子を送く起これ。 道知は強くとても最わなかった、敵政は古を使ろうとせるが、 心の式者は直対の心子を立く強いい少年だった。博札に思い遠述もうとするが、他の既氏の武者が追っていては げちれそうになかったため、這く這く少年を討ち取った。直実は武家の無情を振り、後に出家した。 上なかりのある場所 ・朝政院 ●期は出帰い途中、武器まで来たとを朝にかかったが、脚成院に参覧し、阿弥陀如来に早墾を折擱したという、たちまち囲観、
<ul> <li>班展: 班員:</li> <li>助品は、天永元年(一一三二)三月、平清儀の父に当たる平忠鬘が昇越を許されるところから始まる。 たがりを蹴隊とそうとする支援な忠認はうまくかわし、そのうえ息子の清盛も出世街道を突を抜けた。 長も、親族を利用して反乱分子の穿を読みながら力を着えていった平氏は栄華を誇るようになる。 調子付く平彩&gt;</li> <li>の栄華に指れたのか、清盛は、待らせていた紙王という合拍子(初装)舞をする遊女のこと)を、別の白 である仏に気が移ったせいで道い出してしまうという字許を起こした。しかも仏も無常を感じ紙王ととも せを許る姿に与なそやつしてしまうのであった。</li> <li>パ、本世の病差か、最重においても、二条天気と後白时込息が親子でありながら増みあっていた。しかも 反乱は前代の故道御天皇の皇后を所望し、強引に入内(内蛮に入ること)させてしまった。しかしそんな 反唱 (新により若くして合を失ってしまい、その次代に御年2歳の六条天皇が違いた。そして二条天星 長で等件は起こった。葬儀の参判で養殖寺の悪態道が比較山の葬送し名人したのである。怒った比較山の お実舞踊寺の友孝の、清水寺を使いたのであった。</li> <li>シレキ中、大条天皇に代わって平安一長を皇后にもつ皇太子、高倉天皇が即位する。とうとう平家は天皇</li> </ul>	7 班 主な地名・戦場・史跡
出長: 誤員:   出長: 誤員:   物語は、天承元年(一一三二)三月、平清磁の父に当たる平忠磁が昇聚を許されるところから始まる。 たがりを観像とそうとする貴秋を忠磁はさまくかわし、そのうえ急チの清磁も出世前道を突き抜けた。 を6、観鉄を利用して反気分子の芽を懐みながら力を着えていった平氏は栄華を誇るようになる。   調子付く平家>   の実際に掲れたのか、清弦は、待ちせていた紙玉という自拍子(別坂し舞をする遊女のこと)を、別の自 である仏に気が移ったせいで追い出してしまうという事件を起こした。しかも仏も無常を感じ紙玉ととも をだがる吹になきやつしてしまうのであった。   た、   た、   た、   た、   たのであった。   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、   、     、   、         、 </td <td>7 班 主な地名・戦場・史跡 班王 照見: 西山の戦いで山中に敗走した朝朝は数の程原発時に見つかるも、景時はこれを見逃した、これにより、むした寒時は頼朝に直用される。土尼のしとどの首がこの逸話にまつわる伝説の地として伝わっている。 既の成者・患谷直然が城を抱していると、沖へ逃げている平氏の次者を是つけたので、原ってくるようがいかけた、武者は違うの心子を送く起これ。 道知は強くとても最わなかった、敵政は古を使ろうとせるが、 心の式者は直対の心子を立く強いい少年だった。博札に思い遠述もうとするが、他の既氏の武者が追っていては げちれそうになかったため、這く這く少年を討ち取った。直実は武家の無情を振り、後に出家した。 上なかりのある場所 ・朝政院 ●期は出帰い途中、武器まで来たとを朝にかかったが、脚成院に参覧し、阿弥陀如来に早墾を折擱したという、たちまち囲観、</td>	7 班 主な地名・戦場・史跡 班王 照見: 西山の戦いで山中に敗走した朝朝は数の程原発時に見つかるも、景時はこれを見逃した、これにより、むした寒時は頼朝に直用される。土尼のしとどの首がこの逸話にまつわる伝説の地として伝わっている。 既の成者・患谷直然が城を抱していると、沖へ逃げている平氏の次者を是つけたので、原ってくるようがいかけた、武者は違うの心子を送く起これ。 道知は強くとても最わなかった、敵政は古を使ろうとせるが、 心の式者は直対の心子を立く強いい少年だった。博札に思い遠述もうとするが、他の既氏の武者が追っていては げちれそうになかったため、這く這く少年を討ち取った。直実は武家の無情を振り、後に出家した。 上なかりのある場所 ・朝政院 ●期は出帰い途中、武器まで来たとを朝にかかったが、脚成院に参覧し、阿弥陀如来に早墾を折擱したという、たちまち囲観、
<ul> <li>         ・</li></ul>	フ 班 主な地名・戦場・史跡     エ展:     エ度:     エ度:
<ul> <li>         ・</li></ul>	7 班 主な地名・戦場・史跡 
出展: 誤員:   出展: 誤員:   物語は、天永元年(一一三二)三月、平清暖の父に当たる平忠爆が昇級を許されるところから始まる。 たがりを観像とそうとする貴族を忠康はまくかわし、そのうえ息子の清盛も出世街道を突き抜けた。 表も、親族を利用して没の分の夢を懐みながら力を着えていった平氏は栄華を誇るとうになる。   調子付く率>   の栄華に指れたのか、清盛は、傍らせていた紙玉という自拍子(男族し様をする遊女のこと)を、別の自 である仏に気が移ったせいで追い出してしまうという事件を起こした。しかも仏も無常を感じ紙玉ととも 起を祈る波に身をやつしてしまうのであった。   ト、本児の商業か、島窯においても、二条天気と彼自時法島が親子でありながら借みあっていた。しかも   たこの、非規の参判で残価のの悪情違がは袁訓の事送に違入したのである、怒った比叡山の   富は前代の故辺御天泉の皇后を所望し、強引に入内(内護に入ること)させてしまった。しかしそんな   天電の商業の、島窯においても、二条天気と彼自時法の記録でよのた北叡山の   富は前代の故辺御天泉の皇后を所留し、強引に入内(内護に入ること)させてしまった。しかし   たんな   たん、大概の参判で残価のの悪情違がは袁訓の事送に違入したのである、怒った比叡山の   富は朝鮮のの末寺、清水寺を使いたのであった。   うした中、六葉天気に代わっ平家一族を最后にもつ意太子、高倉天気が即位する。とうとう平家は天気   友となったのであった。   たんで平家の聞かが事件を引き起こしてしまう。毎期返回に対して清潔の延復感が鎮得をはたらき、逆にや   られてしまったのである。   たんでである。これを問いた清潔は迷惑し馬筋に対して清潔の延復感が鎮得をはたらき、逆にや   られてしまったのであった。   たんでである。これを問いた清潔は迷惑し馬筋に対して遺露の延常近時をもあり、   たんでである。これを問いた清潔は悪怒に話しては夏を見かの延常が見か。   日本の変の御いたのであった。   たんでである。   たのである。   たんでである。   たんでである。   たんでであった。   たんで、   たんでである。   たんでである。   たんでである。   たんでである。   ためていためである   たんでである。   たいのであった。   たんでである。   たんでである。   たんでである。   たんでである。   たんのである   たんのでのである   たんのである   たんのである   たのでのである   たんのである   たんのである   たんのである   たんのである   たんのでのである   たんのでののの   たんのでのです   たんのでのである   たんのでのである   たんのでのである   たんのでのでのる   たんのである   たんのである   たんのでのである   たんのでのである   たんのでのである   たんのでのである   たんのでのでののた   たんのでのでののでのののでののの   たんのでのでのでののののののののののののののののののののののの	フ 班 主な地名・戦場・史跡     エ展:     エ度:     エ度:
<ul> <li>         ・          ・          ・</li></ul>	子 班 主な地名 ・戦場 ・史跡     チェン・     エー・     ー・     エー・     ー・     エー・     ー・     エー・     ー・     エー・     ー・     エー・     ー・
<ul> <li>         ・</li></ul>	T 班 主な地名 ・戦場 ・史助称     T 班 工 田県:     T 王 田県:
<ul> <li>         ・</li></ul>	7 班 主な地名・戦場・史跡         班:         班:         班:         班:         西山の戦いで山中に敗走した朝朝は敵の限隊勢に足つかるも、教特はこれを見遇した、これにより、む た思知は頼朝に直用される、土地のしとどの資がこの逸感にまっわる伝説の地として伝わっている。 既成成者・最容道が娘を抱していると、やべ逃げている平氏の決者を見つけたので、既ってくるようが いかけた、武者は勤心引き返し広谋と組むが、成取は強くとても厳わなかった。敵政は古を取るのくつろくろようが いかけた、武者は勤心引き返し広谋と組むが、成取は強くとても厳わなかった。敵政は古を取るのといろが たの大きになったたか、这く位く少年を封ち取った。広東は武家の無情を見め、我太は古を取るのでいてない けたそうになったたか、这く位く少年を封ち取った。武実は武家の無情を見り、後に出家した。 たのためのある場所         ・ 加切 知知いの途の大意をはなくなく少年を封ち取った。武夫は武家の無情を見り、使用家に取るためっていない いたそうくにないため、社会な位々やなどうを大きな、御殿郎の武者が通っていていない たちまちに思い。 たちまち無思い。         ・ 加助 知知いの途をとはが見ていたちんか、真正はなの無情を見いました。 たたたちたちため、他間を見いのかったさたろ、 ためため、 いたの間の他のため、「学家物感を引しませきる他においい」、 いた思し、 いたの間の他のないため、ためな「学家物感を引しませきる他においか」         ・ 小規画理 これたいために満たたた人が必然をと見べていた たちため、現職員、「学家物感を引しませきる他においか」         ・ 小規画理 これたいためでは助したいた人が必然をと見べていた たちため、現職員、「学家物感を入しませたろん」         ・ 小規画理 これたいためで、近日は前途をはていかすべのただ人が必然をと見べていた         ・ 小規画理         ・ いた理しためであいたが見ぶがためためでありまいためためためた。 を見いましためでありまのためであいたろん」         ・ いた聞       ・ いたのであいたろん」         ・ いためであいためであいたろん」       ・ いたのであいためで、         ・ いためであいたろん」       ・ いためであいたろん」         ・ いためであいたろん」      ・ いためであいたろん」
田展: 招展:     田展:     田原:     田E:      田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:     田E:	ク 班 主な地名 ・戦場・ や史跡           班: 班県:           班: 田県:           地域の戦いない中にないたく頼朝は敵の関原男時に見つかるも、祭時はこれを見感した、これにより、や たいた場所は頼信に追用される、土地のしとどの道がこの逸話になったる伝説の地をして伝わっている。           販の武者・服谷道実が顔を探していると、神へ逃げている平氏の武者を見つけたので、気があり、 たいたい、花茸は鳥へ引き返し旗友と組むが、武法道大して長かなかった。飯以は彼を見つけたので、気がるの たいた。水茸は鳥へ引き返し旗友と組むが、武法道大して長かなかった。飯以は彼くの天根の武者を見つけたので、気があり たいた。水茸は海へ引き返し旗友と組むが、武法道大して長かなかった。飯以は葉を見つけたので、気があり たいたさいたなかったたか、这次公々中をおも知った。飯以は娘くとても終わなかった。飯以は妻を見るくろくそろが、 たの式は直実の息子と違が這い少年だった。梅れに思い逃れを見つけてので、気があり たいためための思想・ こちたちにないったたか、这次公々中をおもあのた、飯実は東京の無所を目が、 たいためための思想・ たちたちになかったたか、这次公々中をおもかったが、東京東京家を見つけでので、 ためための思想・ たちたちになかったたか、这次公父中をおもかのかった。飯の親氏の武者が追っている。 のの親 田田四なの年れ、京都を開かるしたかたが、単体が見ついていたが、本見 いたのこで「古る」 ころしていため、「中本」 たちたちかったか、「御見」 たちたちかったか、「中本」 ころしていため、 たちたちからないため、 たちたちかったか、 たちたちかったか、 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちかり たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちたちか。 たちからか。 たちたちか。 たちたちか。 たちからか。 たちからか。 たちかり たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからか。 たちからからか。 たちからからか。 たちからからからか。 たちからからか。 たちからからからか。 たちからからからからか。 たちからからからか。 たちからからからからからか。 たちからからからからからからからからからからか。 たちからからからからからからからからからからからからからからからからからからから
<ul> <li>         ・</li></ul>	ク 班 主な地名・戦場・史助称         班         班         班         班         市場:         地域の戦いで山中に敗走した朝鮮は敵の視察勢に足っかるも、教特はこれを見感した。これにより、む た気勢は頼朝に追用される、土地のしとどの資がこの造話になったる伝説の地として伝わっている。         頭袋がいるのないの見た朝鮮は敵の視察勢に足っかるも、教特はこれを見感した。これにより、む た気勢は頼朝に追用される、土地のしとどの資がこの造話になったる伝説の地として伝わっている。         頭袋がものないるの状態を見していると、神へ逃げている平氏の状者を見つけたので、長のてなるようが いかけた。実者は強々引き返し広実を組むが、必然なくならやなかった。意実は食を見つけたので、長のてなるようが いたれぞうになかったため、这くなら少年を封ち取ったった。意実は実みの無をもなかった。な、東波は食を取るうとなるな、 のたれたりのかるの強い いたもそうになったため、这くなう中をおけるかった。た。東波は食べの無数がなかった。 の実者はないのかるため、 たたちまちの間を、         小朝間         動はためのとしたろ、         小朝間         この主なたのに、         小朝間         このためたしのためためためた。         小朝間         この主なたのに、         小朝間         この主なたのためためたたろんがないためためたしためためためためためためためたかたが、ためまたしたかたかられためためためためためためためためためためためためためためためためためためた         小朝間         一次のためためたのためためためためためたかったの、         小朝間         小朝間         小前間         小前間         小前のためためたがためためためためためためためためためためためためためためためためた
<ul> <li>      提供: 提供:  </li> <li>      提供: 提供:  </li> <li>      物語は、天来元年(一一三二) 三月、平清儀の父に当たる平忠儀が昇機を許されるところから始まる。     たがりを職後とそうとする貴誠を忠忠はまくなわし、そのうえ息子の清儀も出世所道を突き抜けた。     後、観儀を利用して変し分子の穿を値みながら力を着えていった平氏は葉単を誇るようになる。     現代(不実)  </li> <li>      印楽編に満れたのか、清鑑は、得らせていた紙玉という合前子(男髪し舞をする遊女のこと) を、別の白     さるんに気が多ったせいで道い出してしまうという合称を起こした。しかも仏も無常を感じまる。     ため、「「「「「」」」」」、「「」」」、「」」」、「」」」、「」」、「」」、「」」</li></ul>	<text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text>
扭要:	<section-header> <section-header></section-header></section-header>
<ul> <li>         ・          ・         ・</li></ul>	<section-header><section-header><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></section-header></section-header>
扭要:	<section-header><section-header><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></section-header></section-header>
扭要:	<section-header><section-header><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></section-header></section-header>
出張: 提輯:   出版: 提供: 出版:   国際は、天天元年(一一三二)三月、平清確認の父に当たる平思惑が昇降を許されるところから始まる。 たがりを確認とそうとする貴族を思慮は含まくかわし、そのうえ色子の消儀は出版問道を突き抜けた。 たがりを確認とそうとする貴族を思慮は含まくかわし、そのうえ色子の消儀は出版問道を突き抜けた。 とが、親族を利用して変良分子の芽を懐みながら力を書えていった平氏は菜童を誇るようになる。   37. 年本化の備売か、確実は、停めせていた紙正という自由「別族し降をする造女のこと)を、別の自 たかるなに気が移ったせいで追い出してしまうという事件を起こした。しかもんも無常な感じ紙王とさ たちがる友に身をやっしてしまうのであった。   47. 本本の備売か、確実は、停めせていた紙正という自由「別族し降をする造女のこと」を、別の自 たかるなに気が移ったせいで追い出してしまうという事件を起こした。しかもんも無常な感じ紙王とさ たちがる友に身をやっしてしまうのであった。   47. 本本の備売か、確実においても、二条天気と我自可追急が親子でありながら借みあっていた。しから たながな酸が大変なられかった。そして自 ならないなのなかった。   48. 本本の前代のなのなかった。   47. 本本の前代表しても、うの下水のながら借みあっていた。しかし たんだ   48. 本本の前代のなのか、   48. 本本の前代のないた実にはないながら相かたのである。   48. 本本の前代のなのかった。   48. 大本天気に代わって平安で、酸を最后によりて清潔の成実感が気積をはたらき、逆にや ならないたのである。   48. 本本のである。   49. 本本のである、   49. 本本のである、   49. 本本のであった。   49. 本本のである、   49. 本本のである。   49. 本本のであった。   49. 本本のである。   49. 本本のがたのであった。   49. 本本の前代のないが、   49. 本本のである、   49. 本本のである、   49. 本本のである、   49. 本本のである。   49. 本本のである。   49. 本本のである。   49. 本本のないため、   49. 本本のである。   49. 本本のであたれて常いなが、   49. 本本のであたれて常いたが、   49. 本本のであた、   49. 本のでの次代はないため、   49. 本のでの次代は、   49. 本のである、   49. 本のである、   49. 本本のであたれてまご、   49. 本本のであたれてまご、   49. 本本のであたれてまご、   49. 本のでの次代はないため、   49. 本のであため、   49. 本のであため、   49. 本のでの次代は、   49. 本のでの次代は、   49. 本のでの次代は、   49. 本のでの次代は、   49. 本のでのため、   49. 本のでの次代は、   49. 本のでの次代は、   49. 本のでの次代は、   49. 本のでのため、   40. 本のでのた	<text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text>
<ul> <li>     田展: 出員:   </li> <li>     開伝、天承元年(一一二二)三月、平清磁の父に当たる平忠遠が昇級を許されるところから始まる。     がりを構成とそうとする異数を忠遠はうまくかわし、そのうえ色子の清磁も出没街道を突き抜けた。     も、異数を利用して反乱分子の芽を構みながら力を着えていった平氏は栄華を誇るようになる。   </li> <li>     野畑に制して反乱分子の芽を構みながら力を着えていった平氏は栄華を誇るようになる。   </li> <li>     宇都に認れてのが、清磁は、待ちせていた紙モという自治子(別気と舞をうる遊女のこと)を、別の白     ある仏に気が移ったせいで道い出してしまうという事件を起こした。しかも仏も無常な感じ紙王とも     ちんに気が移ったせいで道い出してしまうという事件を起こした。しかも仏も無常な感じ紙王とも     ちんに気が移ったせいで道い出してしまうという事件を起こした。しかも仏も無常な感じ紙王とも     ちんに気が移ったせいで道い消してしまうとかう事件を起こした。しかもしも無常な感じ紙王を     なんないなが、単点に見かていた人に使いて急なな。     しかした人な     島により書くしてもないたであった。     たまの前先か、泉蚕においても、牛実気を、他のドスクスを実気が鋭いた。そしてこ条実発     なんなんな「ころ」を、第位のためたして     まのであった。     たまのの前先か、気がくしたのである。怒った比較山     てきかたのであった。     たまの時代のであった。     たかしたしたであった。     たかした人た何は、気いていたり、たんたのである。     たったのであっ     こんしたのであった。     たかのが多かでいた。そして「単大な長     なったのでかった。     たみの時で、     たったのであった。     たみのであった。     たかのがあいた。     たかのであった。     たかのであった。     たかのであった。     たかのであった。     たかのたのであった。     たかのため、     たかのであった。     たかのであった。     たかのたのであった。     たかのであった。     たかのであった。     たかのためであった。     たかのであった。     たかのため、     たのであった。     たかったる、     たかのため、     たかっため、     たかって、     たんから、     たかってきため、     たがっため、     たかっため、     たかったかた単にないたがる。     たがったん     たがったん     たがったん     たがったん     たかったん     たかったん     たかのが     たかったの     たかったん     たかったん     たがったん     たがったん     たかったか     たかったん     たかったん     たかっため     たかったん     たかっため     たかったん     たかっため     たかったん     たかっため     たかっため     たかったん     たかったん     たかったん     たかったん     たかっため     たかったか     たかっため     たかい     たかっため     たか     たか     たか     たかっため     たかったか     たかっため     たかっため     たかっため     たかっため     たかられため     たかっため     たかっため     たかっため     たかったか     たかっため     たかったか     たかっため     たかっため     たかったか     たかったか     たかったか     たかっため     たかったか     たかっ</li></ul>	<section-header><section-header><section-header><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></section-header></section-header></section-header>
<ul> <li></li></ul>	<section-header><section-header><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></section-header></section-header>
<ul> <li>班展: 班県:</li> <li>は、天東天年(三二)三月、平清磁の父に当たる平忠盛が昇解を許されるところから始まる、 りを確認とそうとする我数を忠逸はうまくかわし、そのうえ息その消感も出世所道を突き抜けた。 、 2度数を利用して反気分子の芽を構みながら力を着えていった平氏は栄華を誇るようになる、 ため、実施していた。「ない」」、「のうえ息子の消感も出世所道を突き抜けた。</li> <li>2時代本事&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;&gt;</li></ul>	<section-header><section-header><section-header><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></section-header></section-header></section-header>
扭要:	<section-header><section-header><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text><text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></text></section-header></section-header>

- 13 -





- 15 -

(10)	近 テーマ (部項与一の平家物語での描かれ方と史実の比較 4長: 近員:
<ol> <li>1. 振須与一と 鎌倉時代初期</li> </ol>	- は の武士。下野国郡領の鎌倉御家人。
源義経(: 元暦 2(	(5011)男、名、赤高、 に仕えた弓の道人、置平合戦(→治束の内乱)の罪、詳範経の軍に従い (1185)年2月讃岐道島の戦いで海上に舟を浮かべた平家の軍勢が 国の局を掲げて覆ぎ出したのを見て、
	にしかれを対称とした話は有名。
た。 敗北。そして、 の神器がないの た。このようた 屋島は現在とい ら、ここが頼り	台川の戦いによって木曽義仲が顕戦朝によって滅ぼされ、平氏は義仲に奪われた領地を回復し その結果、摂津国鉱原まで適出したが、一の谷敏いで麝範輯、源義経に攻められて
激しい9 舟を出し 辞退。そ に与一か 加いが	の中の彫須与一 いが繰り広げられた最為の戦いだが、夕気になり、休戦状態になると、平氏方は美女をのせた小 、 芋の先の間を付よ、と調氏方を挑発した。そこで、源義経えその役存を自由東京に命じたが、 の代わりに与一の兄である彫刻十部を推測する。しかし十部も猫が癒えないと辞退。半ば強制的 (増名された。源平同端が勝須に包まれる中、キーは的に向かって馬を遣めた。彼が高く、なかな 定まらない中、影写好の意味、 正八編に「消振い場大普通」と好凄し、名乗りをかげて天形を尋 5氏方は玉虫を出して、蜘蛛手の辺りを針よと指定した。与一は見事に矢を当てた。そして、これ
https://ja.wi	h3.don.ne.jp/`urutora/heike4.htm kipedia.org/wiki%E9%82%A3%E9%A0%88%E4%88%8E%E4%88%80 II. Lestina
『源平の争乱 『間の本』麻	
『御の本』麻	原與子 29
『御の本』麻 ( 10)	<b>察</b> 與子 29
『 <b>国</b> の本』 森 ( 10, 夏 取現与一と な類氏方の武 ① ②	<ul> <li>原菓子</li> <li>29</li> <li>29</li> <li>29</li> <li>29</li> <li>25</li> <li>26</li> <li>27</li> <li>28</li> <li>29</li> <l< td=""></l<></ul>
『 <b>国</b> の本』 森 ( 10) 夏 を請氏方の武 ① ② ③ 1.実際の人引	<ul> <li>原菓子</li> <li>29</li> <li>29</li> <li>29</li> <li>29</li> <li>29</li> <li>29</li> <li>20</li> <l< td=""></l<></ul>
『国の本』 森 『国の本』 森 「(10) 夏 耶須4-25 (10) 夏 (1) 夏 (1) 東 歌の人 (1) 東 歌の人) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1	<ul> <li>(原菓子)</li> <li>29</li> <li>29</li> <li>(長: 近員:</li> <li>(1) 近長: 近員:</li> <li>(1) 近長: 近員:</li> <li>(1) 近長: 近長:</li> <li>(1) 近長: (1) 近長:</li> <li>(1) 近長: (1) 近長: (1) 近長:</li> <li>(1) 近長: (1) 近長: (1) 近長:</li> <li>(1) 近長: (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1)</li></ul>
『国の本』菜 ( 10) ※ 部領4-と な部氏方の訳 ① ② ③ 〕 1.実際の人 【 斯領4-は 年に副領岳で しかし、実 星 2.平家物語 「 屋島の本』菜	<ul> <li>原菓子</li> <li>29</li> <li>29</li> <li>29</li> <li>29</li> <li>29</li> <li>20</li> <l< td=""></l<></ul>

どの観前だと書かれている。 そして、眉を射るときに体に折って無事成功させ、皆から喝泉を浴びた。しかし、脂領与一の弓の観に感動し て約の上で貴美舞っていた平氏の氏がいたが、伊勢三郎親盛の命令でその人を射とめている。これにより、平家 は怒って源氏を煽ると、源氏の三尾鼠十郎らち人が出降した。悪七氏筆景指と三尾鼠十郎との一騎打ちで三尾鼠 十郎が命からがら逃げ切ったのち、平家はこれに調子づいて源氏を攻撃するが源氏に返り討ちにあって終わった。 そのエピソード以降、脳頃与一に関しての描写はない。

3.まとめ

3.まとめ 形須与ーは実際に存在したのかは不明だが、平家物語の中では弓の名手とされ、場果を浴びたすごい式得で あるとされた。実際、この出来事の後に平氏と類氏の間でちいさな娘が起こり、平氏は彼れ、その後境ノ捕の戦 いで滅亡している。このことを考えると、那須与ーは課氏に大きく賞献したということもできる。また、平家物 語はあくまで物語であるので、武勇伝を伝えるために誇扱されている所もある。だから、鍵が多い人なのである。

参考文献 http://www.h3.dion.ne.jp/~urutora/heike4.htm